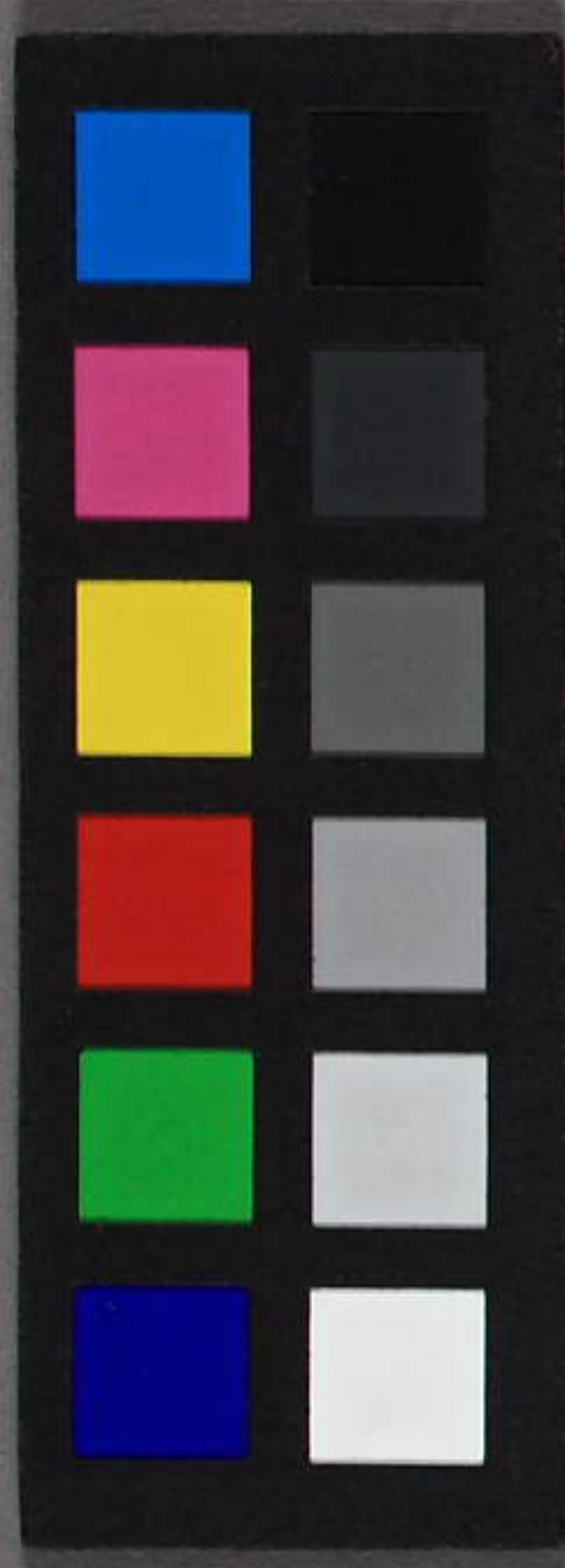


赤彦童謡集

島木赤彦著



赤彦童謡集

島木赤彦著

東京古今書院發行

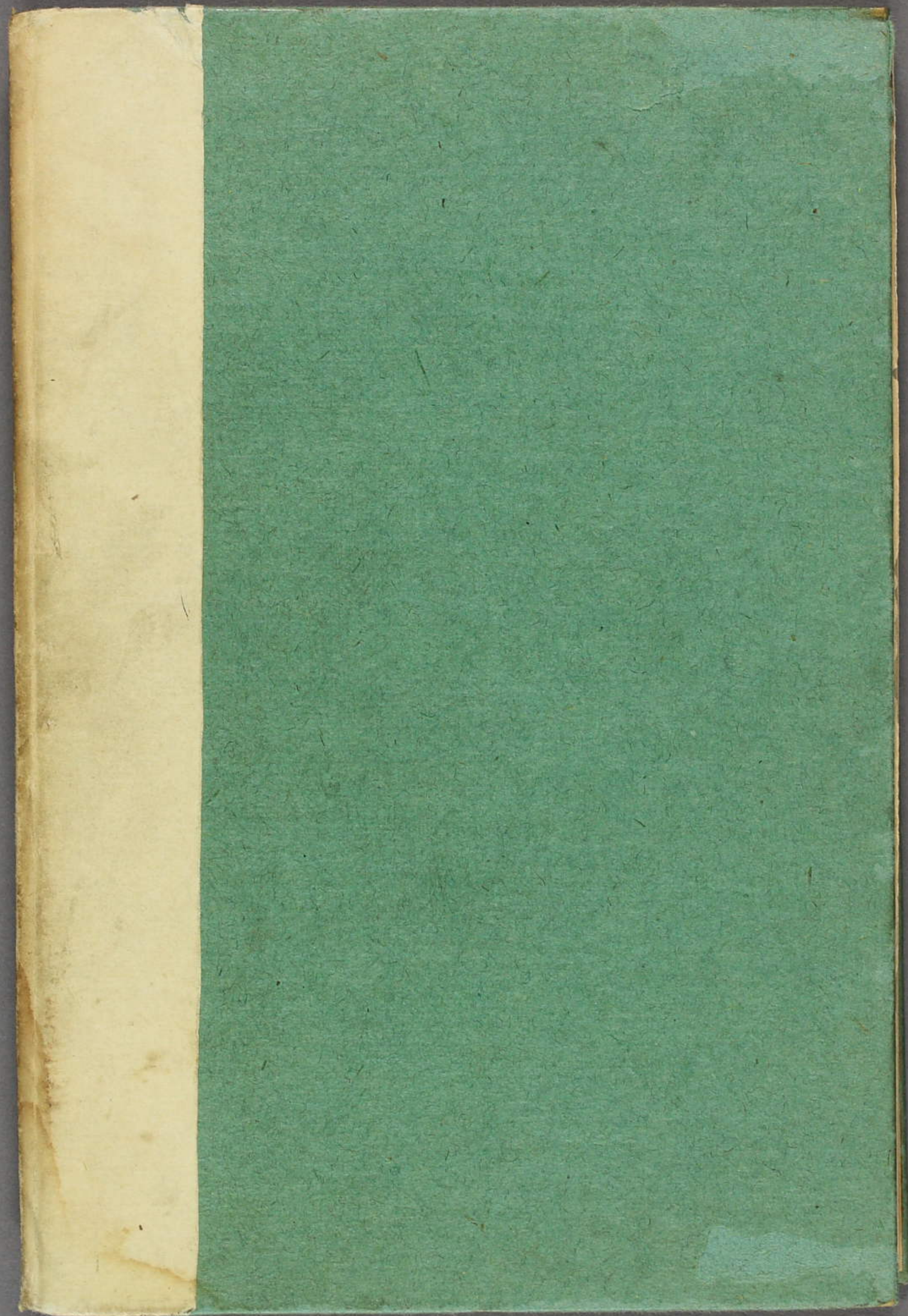


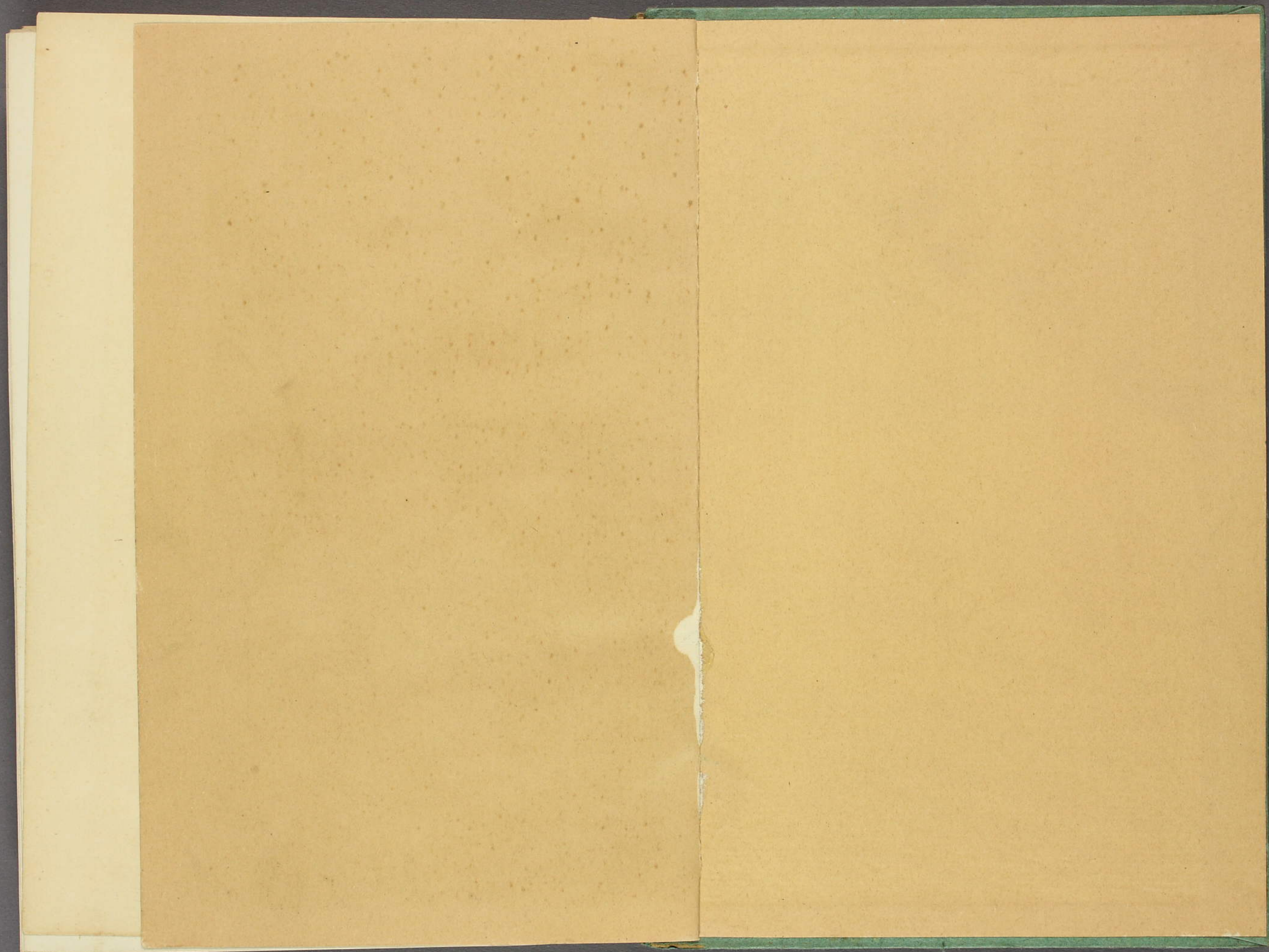
赤彦童謡集



島本赤彦著

赤彦童謡集





挿 扉 装
畫 畫 幀
及 及
口 口
畫 畫

川 平 森
上 福 田
四 百 恒
郎 穗 友

島本赤齋著
赤齋童謡集

東京古今書院發行







目次

挿畫	母さんの里 (三色版)	二
母さん	の里	二
仔	犬	四
子	守	六
木	鳥	八
仔	猫	一〇
雀		一三
鶯		一四
くぬぎ	枯葉	一六

燕 <small>つばき</small>	桃 <small>もも</small>	土 <small>つち</small>	一 <small>いち</small>	兄 <small>あに</small>	霞 <small>あられ</small>	石 <small>いし</small>	風 <small>かぜ</small>	行 <small>ぎやう</small>	挿畫 <small>さしゑ</small>	お山 <small>やま</small>
	の	堀 <small>ほり</small>	月 <small>づき</small>	弟 <small>あに</small>		工 <small>かど</small>		水 <small>みづ</small>	行 <small>ぎやう</small>	の行者 <small>ぎやうじや</small>
	花 <small>はな</small>	れ	日 <small>ひ</small>							
.....
六四	三三	六〇	五六	五五	五四	五二	五〇	四八		四二

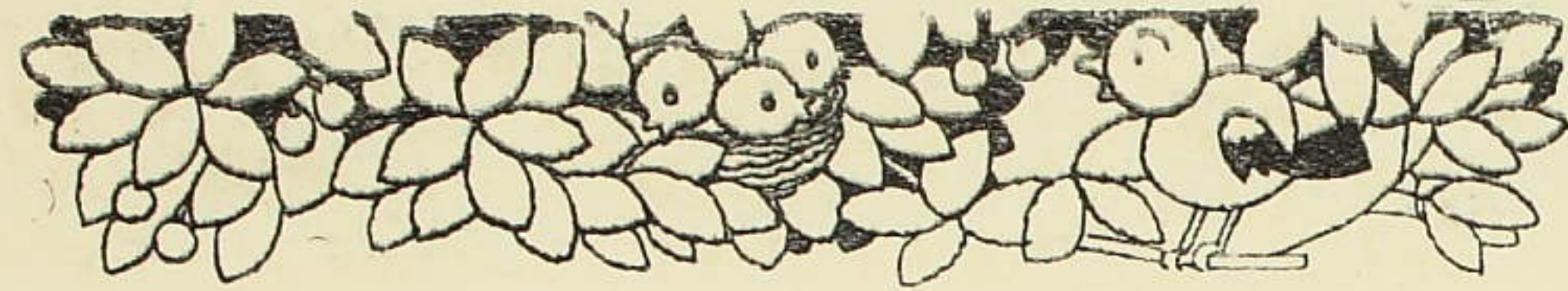
ほととぎす	猿 <small>さる</small>	よ	木 <small>き</small>	野 <small>の</small>	鍋 <small>なべ</small>	焚 <small>たき</small>	椿 <small>つばき</small>	挿畫 <small>さしゑ</small>	山 <small>やま</small>	杉 <small>すぎ</small>
.....	ひ	しの		の	のお	き	の	椿 <small>つばき</small>	の	茂 <small>も</small>
.....	き	芽 <small>め</small>	馬 <small>ば</small>	桃 <small>もも</small>	尻 <small>しり</small>	火 <small>び</small>	苔 <small>つばみ</small>	の	作 <small>さく</small>	
.....	苔 <small>つばみ</small>
二〇	三八	三六	三四	三二	二六	二六	二四	苔 <small>つばみ</small>	二八
								苔 <small>つばみ</small>	(三色版)	

赤彦童謡集

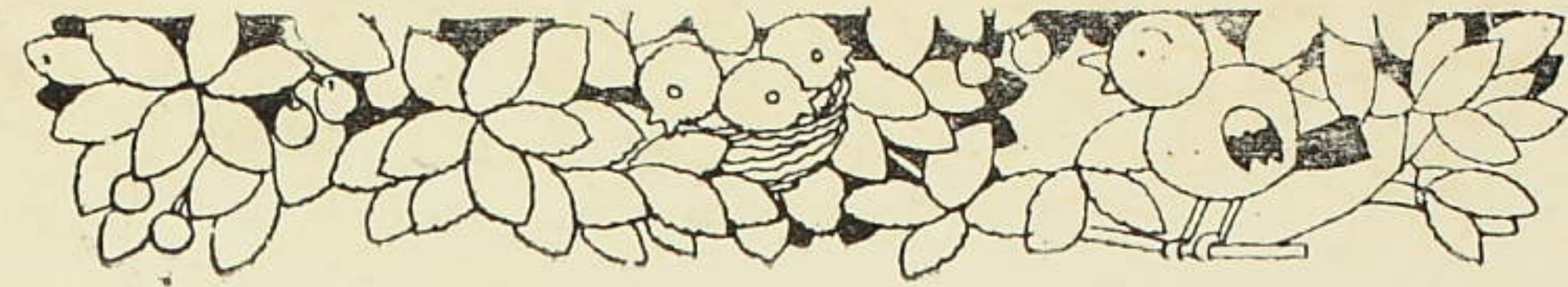


SHIRO

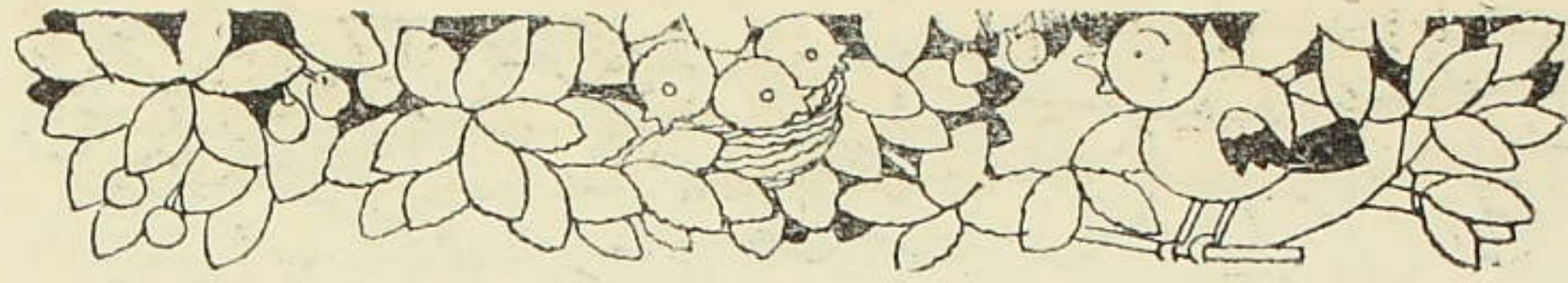
此の童謡集は、小學校から中學校高等女學校初年生
あたりまでの少年少女諸君によんでいただくつもりで
出しました。幼年のかたに分りにくい歌は、飛び越し
て読んで下さい。著者は素朴な少年少女を好みます。
この本は皆さんを浮き立たせません。花やかな歌は一
つもありません。そのつもりで読んで下さい。あまり
口早やでなくそろそろと読んで見て下さい。(赤彦)



お日^ひさま待^またれ
夕^{ゆふ}日^ひが赤^{あか}い
あ^あの森^{もり}暮^くれて
こ^この森^{もり}暮^くれて
坊^{ぼく}やの足^{あし}がおそい



母^{かあ}さん^{さん}の里^{さと}が遠^{とほ}い
あ^あの野^のを越^こして
こ^この野^のを越^こして
夕^{ゆふ}日^ひが低^{ひく}い
お日^ひさま待^またれ
母^{かあ}さん^{さん}の里^{さと}



仔犬

赤犬仔犬

自分の尻尾に

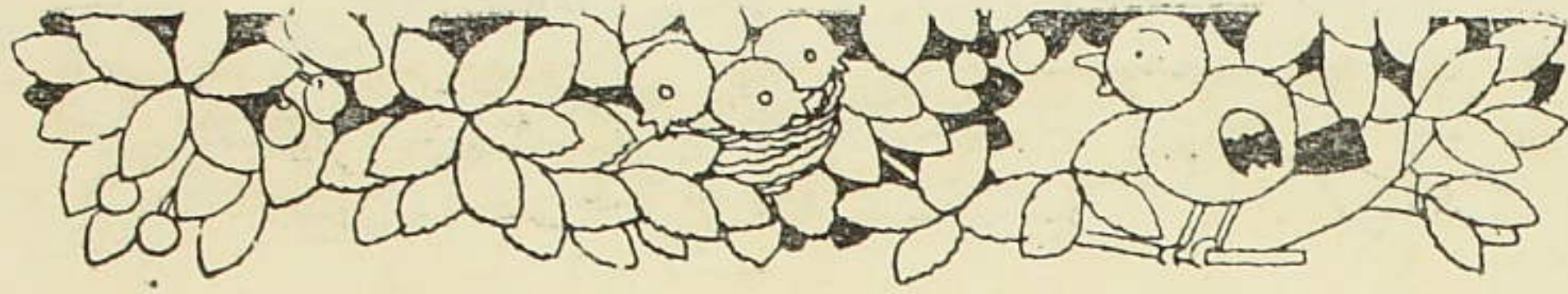
じゃれついて

まはるまはる

くるくるまはる

まはるまはる

仔犬がまはれば



目玉がまはる

光がまはる

くるくるまはる

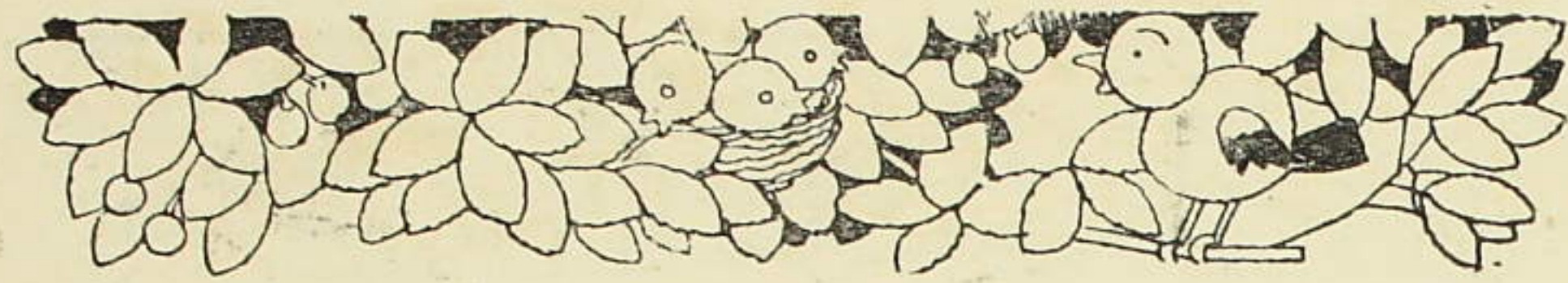
まはれまはれ

一心にまはれ

自分の口が

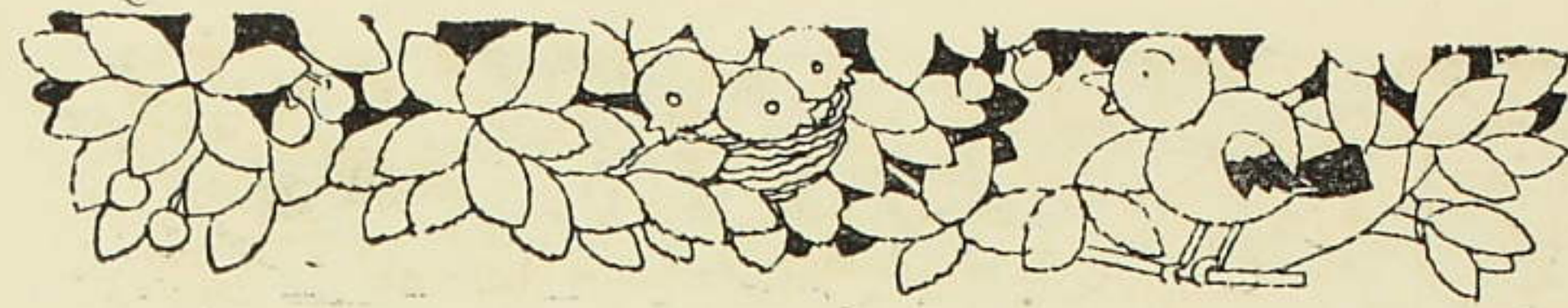
自分の尻尾に

いつまでもまはれ

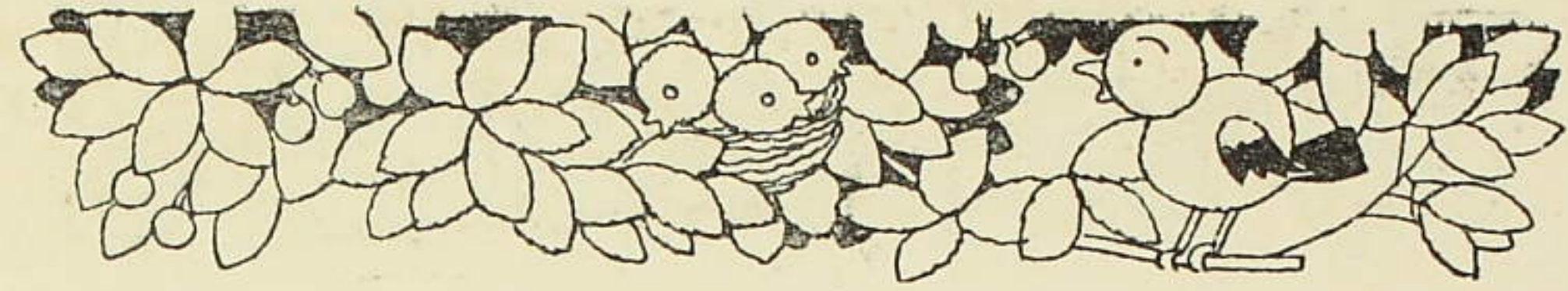


子こ守もりはつらい
 川かは風かぜ寒さむい
 山やま風かぜ寒さむい
 目めがさめた
 こんこん小坊主こぼうし

小坊主こぼうしが動く
 はんとんの中の
 ねんねこばんとん



子こ守もりの半纏はんてん
 小坊主こぼうしが重い
 草履ぞうりが切れ
 尻しり切きれ
 子こ守もりの草履ぞうり
 こんこん子守こもり
 子こ守もり



木きつつきき鳥とり

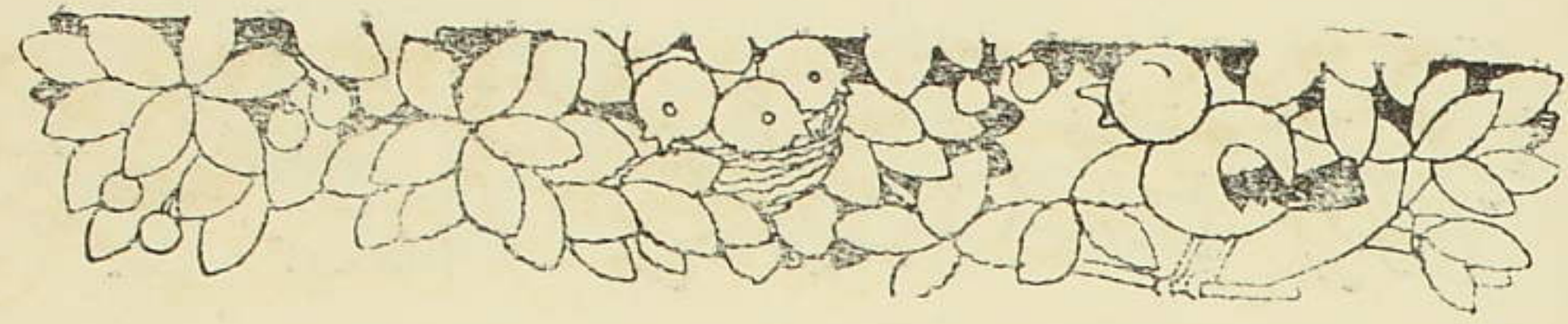
ううららのの小こ藪やぶの

栗くりのの木き林ばやし

雪ゆきがが白しろくくて

木こ立だちがが黒くろい

朝あさ日ひがが照てれれば



猶なほ雪ゆきがが白しろい

夕ゆふ日ひがが照てれれば

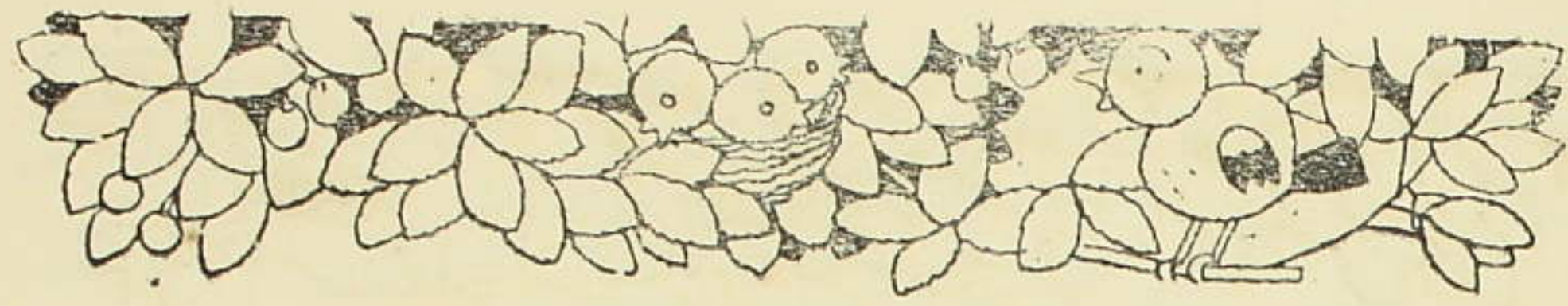
猶なほ木きがが黒くろい

木きつつきき鳥とりが

黒くろいい木きををたたたたく

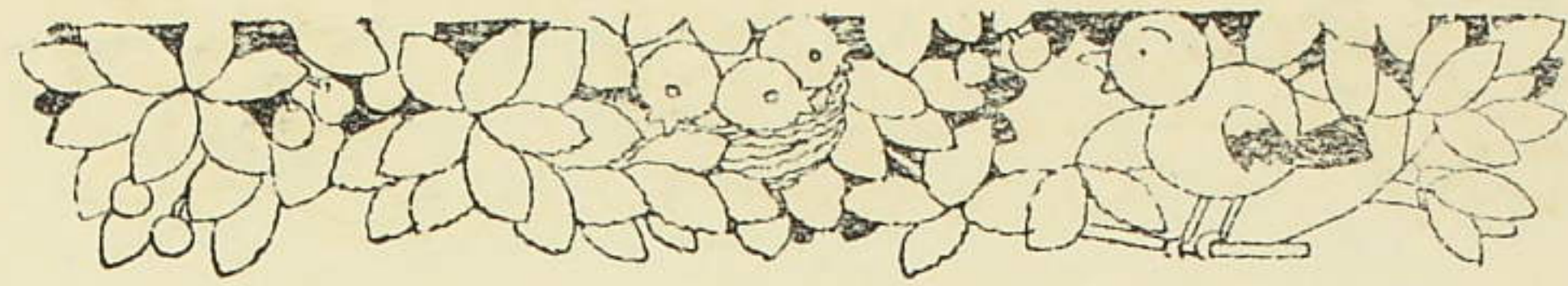
ここつつここつつたたたたく

暮くれれててももたたたたく



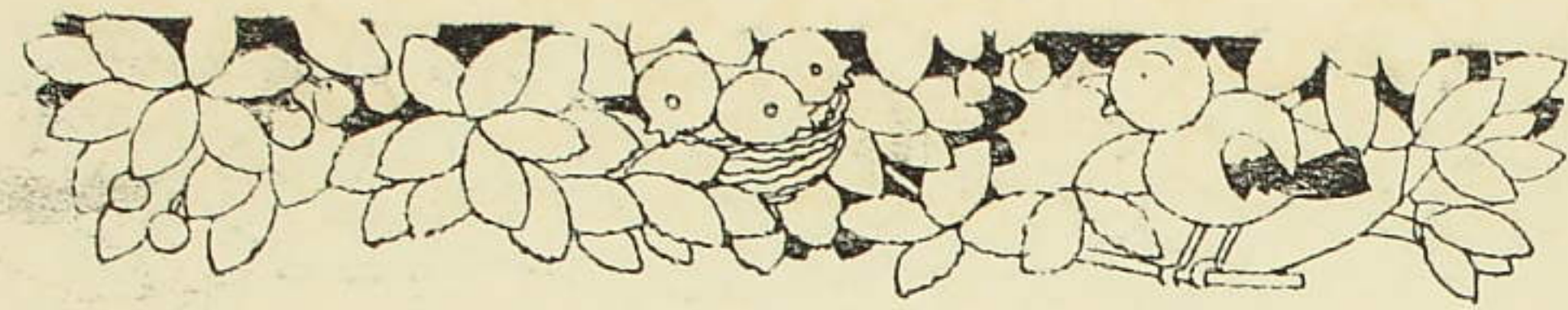
ころころ仔猫よ
 起きろよ仔猫
 わたしの足に
 しびれがされる

わたしもすわる
 すわる片足
 畳にかかる

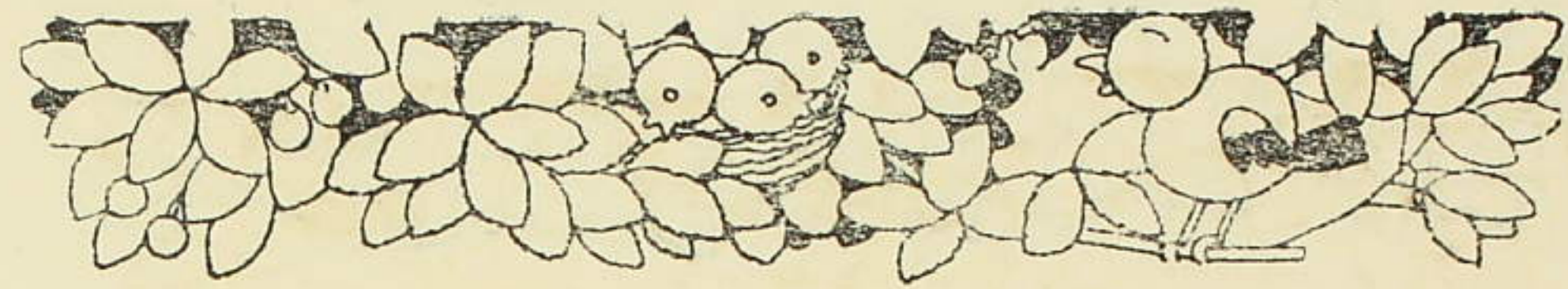


仔猫

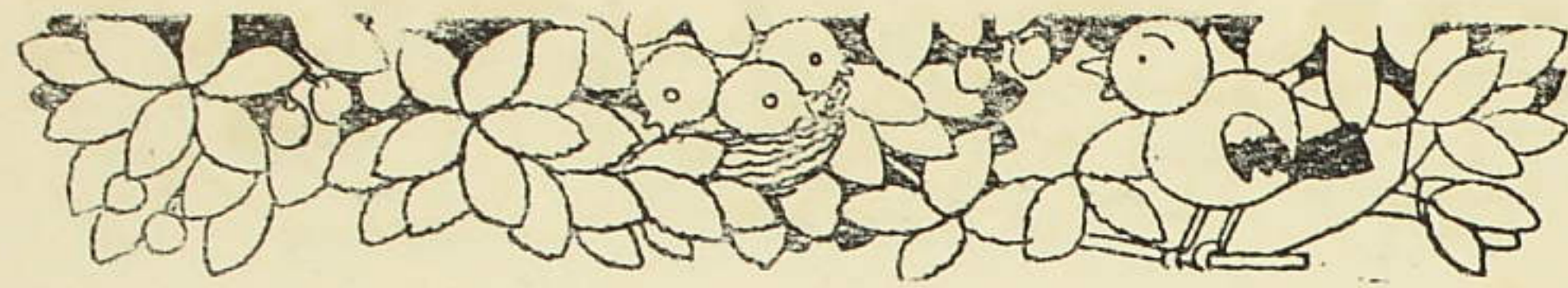
紅い座布團に
 仔猫がねむる
 仔猫ころころ
 丸くなつてねむる
 ひこつ布團に



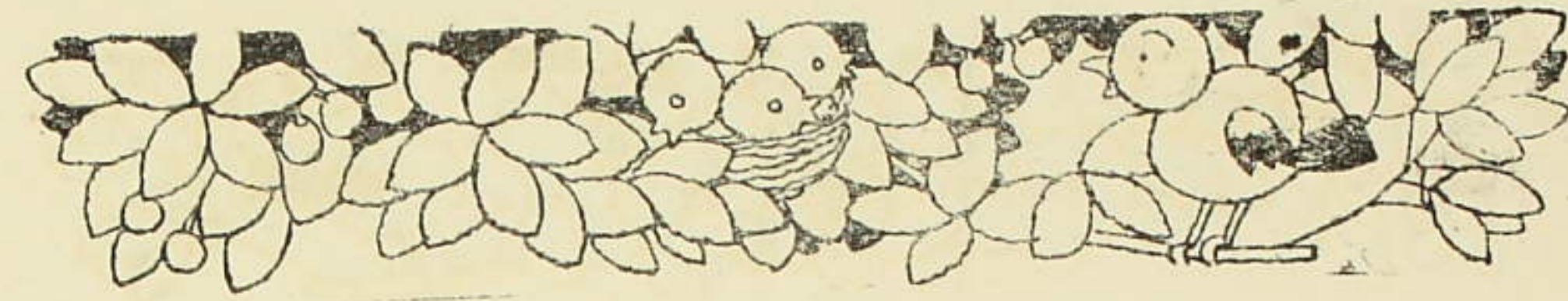
捕とれぬかなあ
こちら向むいてる
平へい氣きな顔かほして
三みつつながら
捕とれぬかなあ
こちら向むいてる



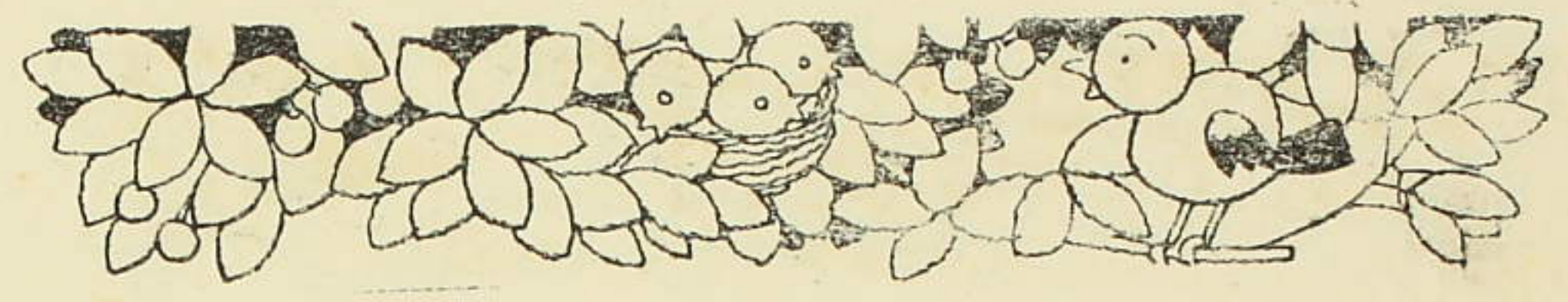
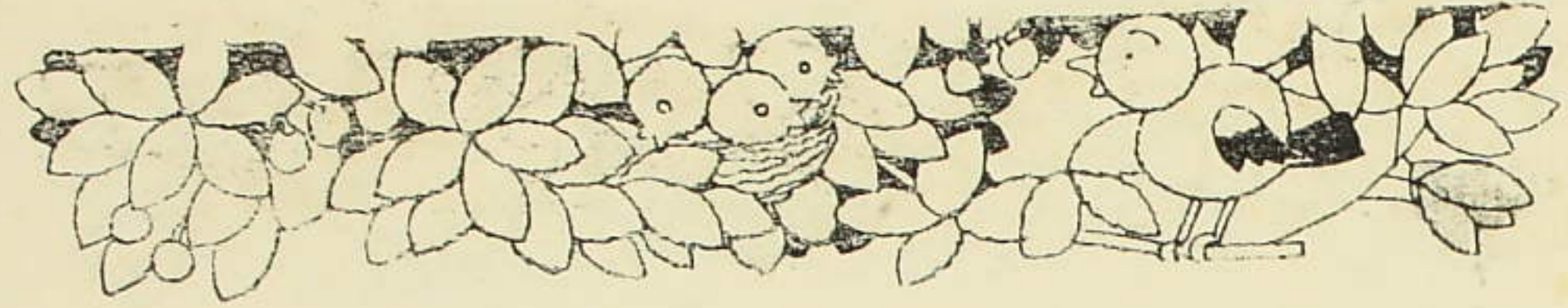
雀すずめ
柿かきの木きの枝えだに
三みつつながら
捕とれぬかなあ
雀すずめ三みつつるる



鶯^{うぐひす}もぬれる
 鶯^{うぐひす}の木の芽は
 ぬれても
 伸^のびる
 鶯^{うぐひす}の羽^{はね}は
 日^ひが照^てつて
 か
 わく



鶯^{うぐひす}
 榎^{えん}山^{さん}に
 なくうぐひすは
 雨^{あめ}にぬれる
 榎^{えん}の芽^めが
 みじかくて
 榎^{えん}の芽^めもぬれる



くぬぎ枯葉

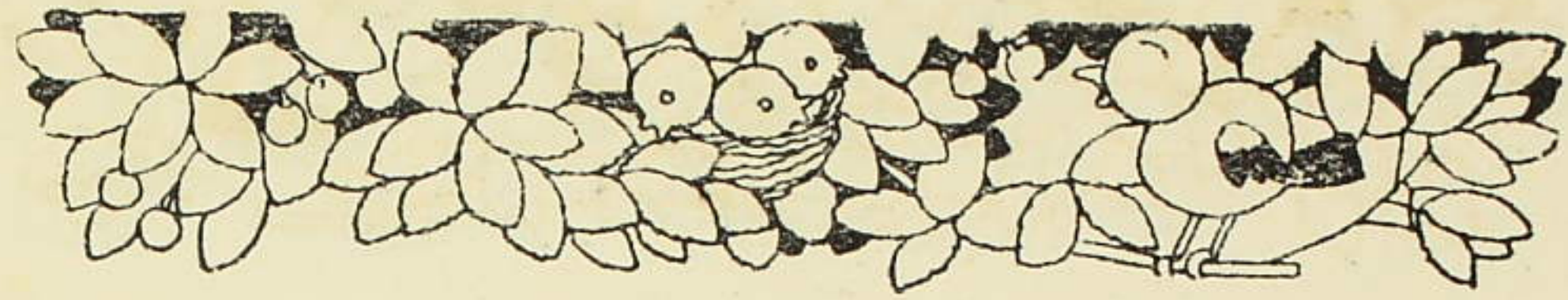
櫟枯葉は
芽が出て
落ちる
ぼそりぼそりこ
一葉づつ落ちる
枯葉落ちれば
かくれて

見えぬ
可愛さうなは
龍膽の小花

歩るきや足音
止まれば
静か

ぼそりぼそりこ
枯葉が落ちる

春の龍膽は極めて細かい紫色の花で、枯草の根もさなごに、ひっそり咲いてゐます。氣をつけて御覧なさい。可愛い花です。



杉

野中に立てる一本杉

見れば見るほご見上げるほご

真直に伸びた幹の勢

高い幹から張り出す枝

張つて張つて張り出して

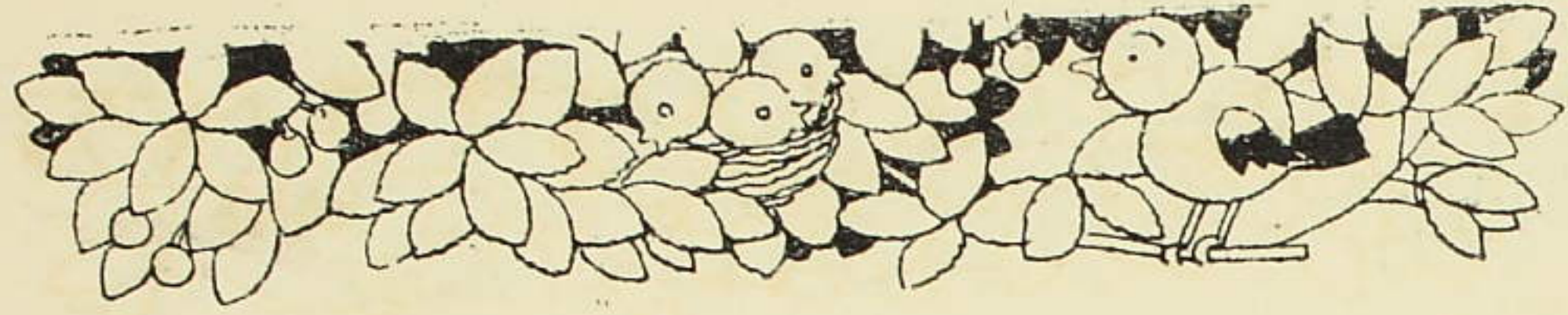
枝を重ねる枝のいきほひ

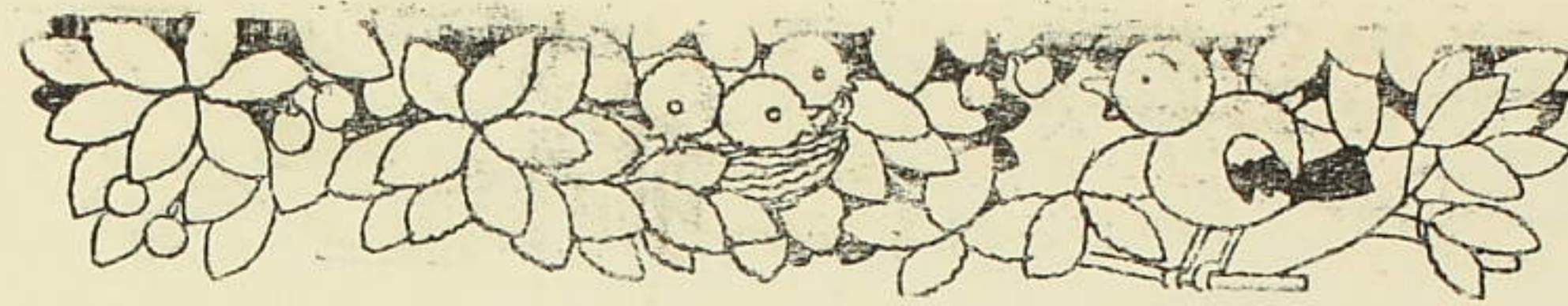
ごらんなきい土の下から
土を裂いて盛り上がつて
水を吸ひあげる根のいきほひ

土が深くて泉が湧き

杉が高くて雲が動く

月の通り日の通る所

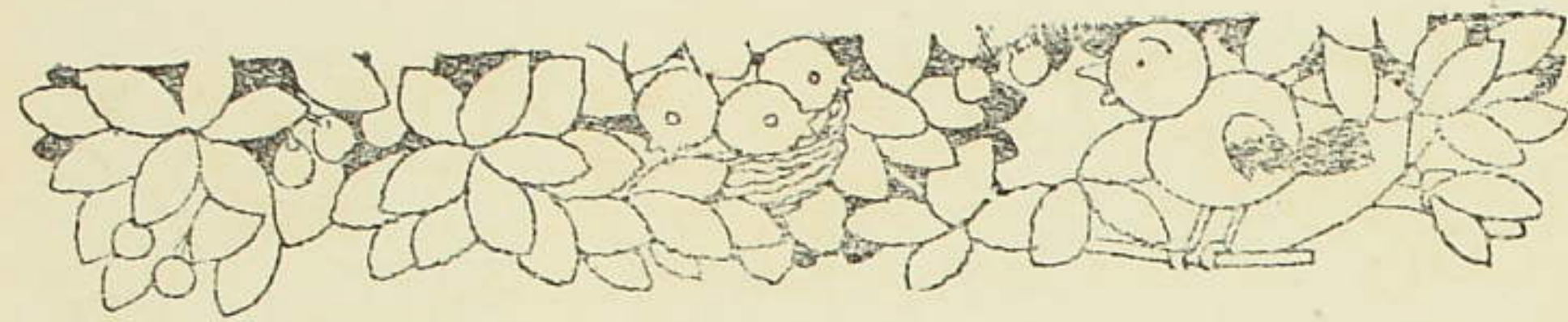




山の茂作

山の茂作が炭やく煙
木立にかかつて木立が黒く
顔にかかつてお色が黒い

山の茂作が煙草をふかす
大きな鼻から煙をふかす
二つ孔から盛にふかす



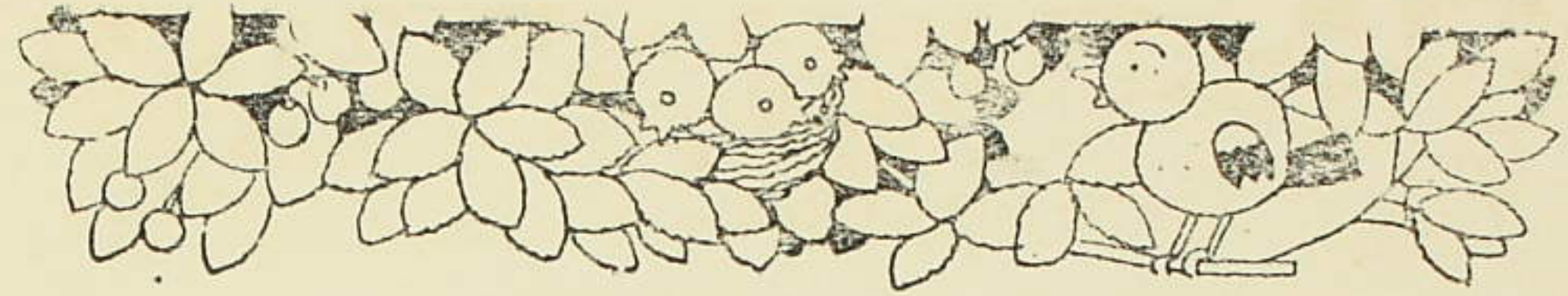
山の茂作が煙管をはたく
黒く大きな手のひらへはたく
もえる煙草を平氣にはたく

山で暮して年より茂作
谷に辛夷の花さくけれど
春が来たことも知らない茂作



SHIRô

な 天^{てん} あ 小^こ 夕^{ゆふ}
あ 氣^き し や や
れ に た け け



椿つばきのつばき苔つばみ

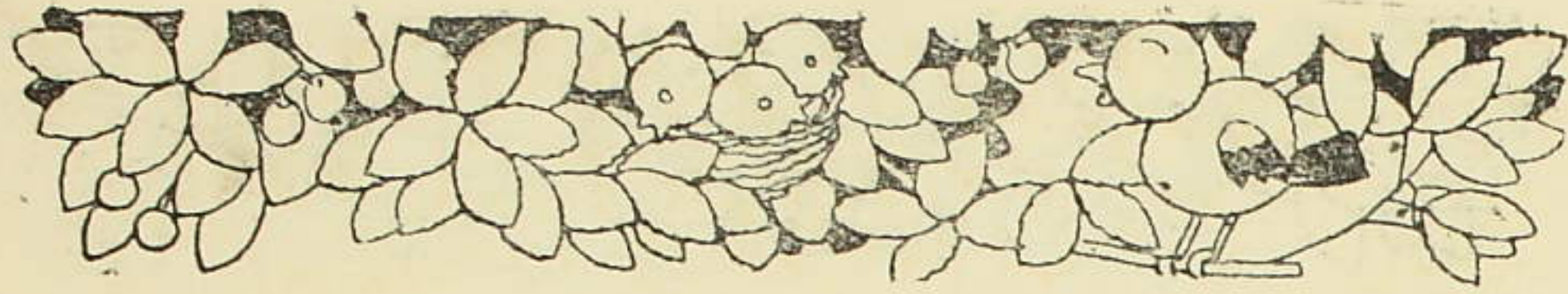
赤あかいつばみ苔つばみ

椿つばきのつばみ

雪ゆきをかぶつて

寒さむそなつぼみ

雪ゆきをはらつて



やさりましよか

雪ゆきをはらへば

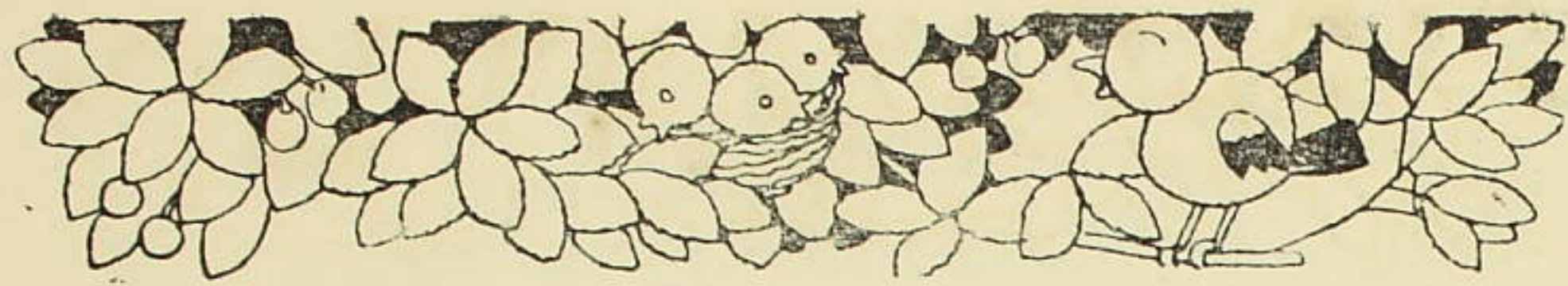
日ひの照てるつぼみ

日ひは照てるけれごも

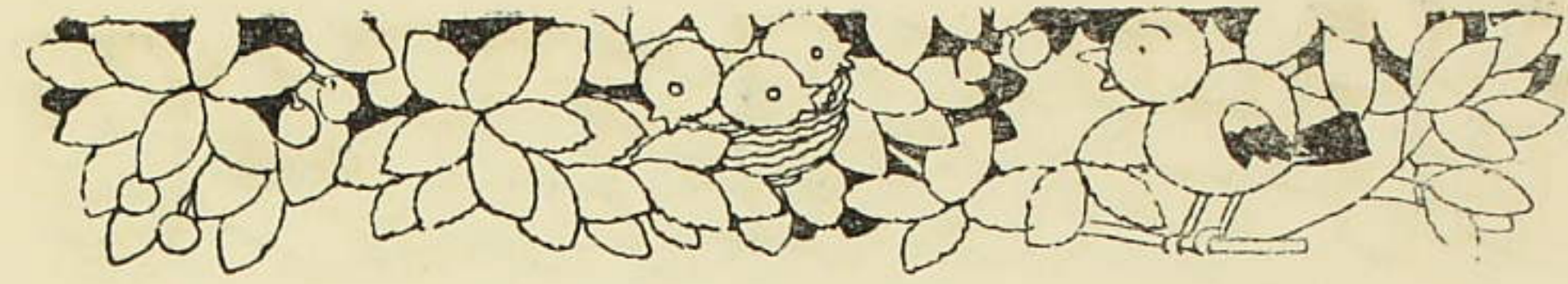
寒さむそなつぼみ

堅かたいつぼみが

ただ赤あかい

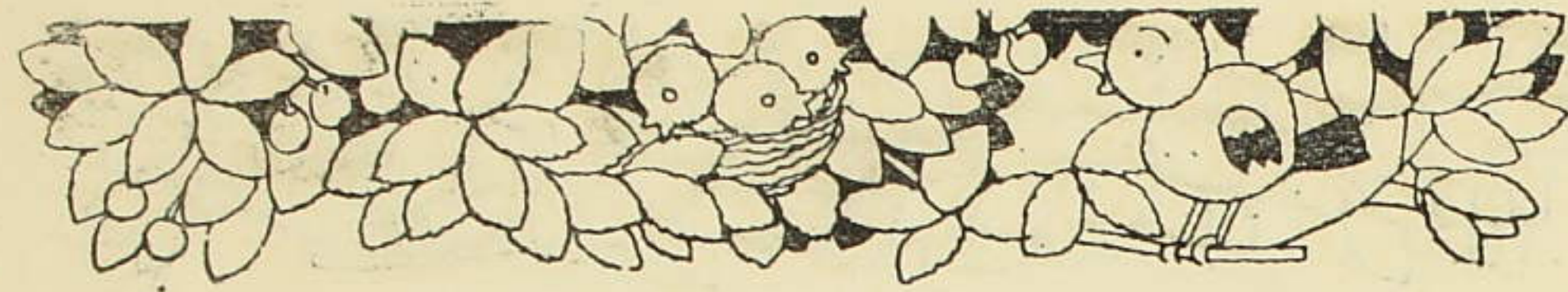


枝えだ柴しば風かぜ雨あま二ふたのの焚た子こ
 折を折をふふ戸どつつそそきき供ども
 つつつついいののづづいたいた火びのの髓すね
 ててててててそそつつ揃そろ髓すねがが
 くくくく通とおるる揃そろううががののぞぞ
 べべろろるるををううたたぞぞくく



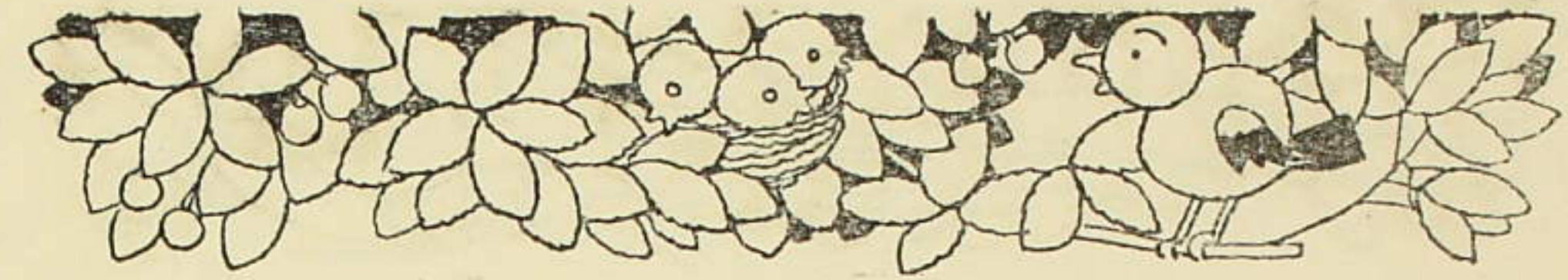
焚た揃そろ子こ圍か枝えだ柴しば爐ろ夕ゆふ
 ききうう供ども爐ろののぐぐ
 火びたたがが裏りつつ火ひれれ
 にに顔かほ揃そろののははがが日ひ
 赤あかががううははくく赤あかぐぐ
 いいたたたたへへべべいいれれ
 べべろろるるるる

焚たきき火び



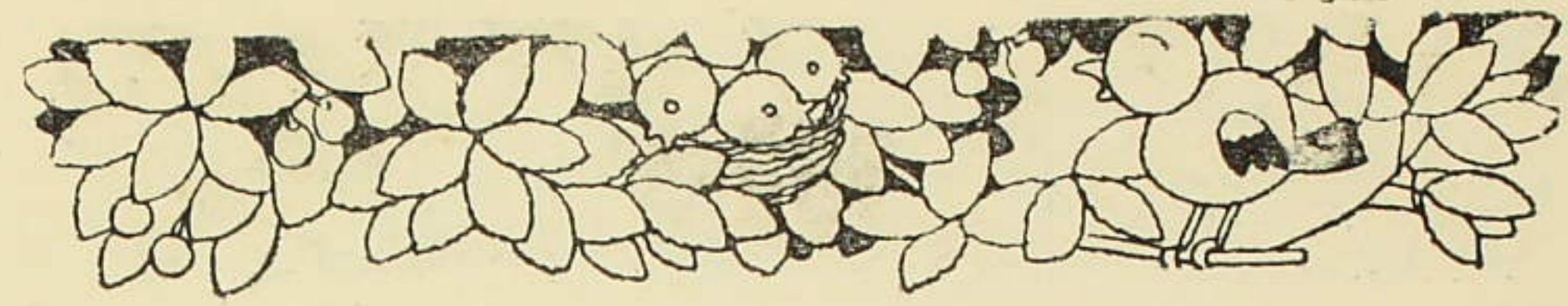
鍋のお尻へ
火がついた

鍋煤ばかり
百も千もばかり
消えてはばかり
ついてはばかり
狐火の行列か



鍋のお尻

野火がついた
火がついた
鍋のお尻へ
火がついた
焚き火が消えた
思うたら



貉びじなごの提灯ちやうちんか

野火のびがついた

火ひがついた

鍋なべのお尻しりへ

火ひがついた

あつたら貉びじなは焼やけ死しんだ

あつたら狐きつねは逃にげてつた

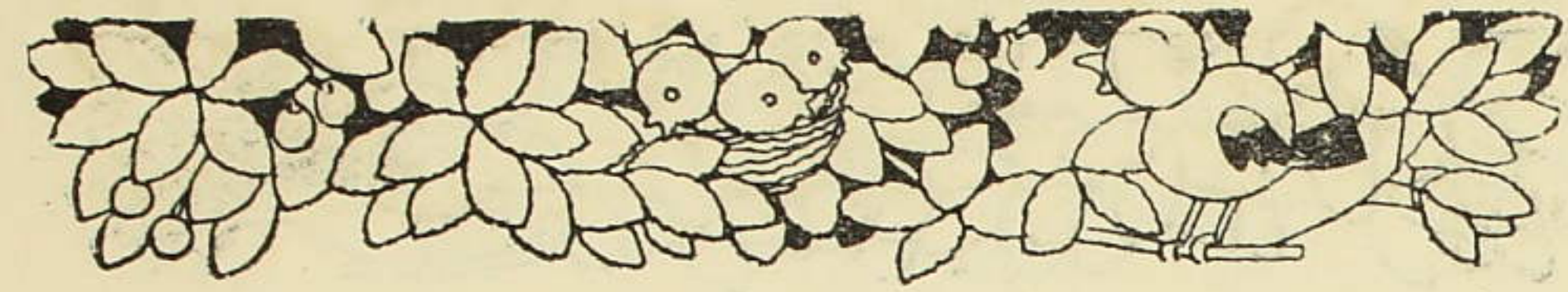
でいろでいろ

かたきがとほる

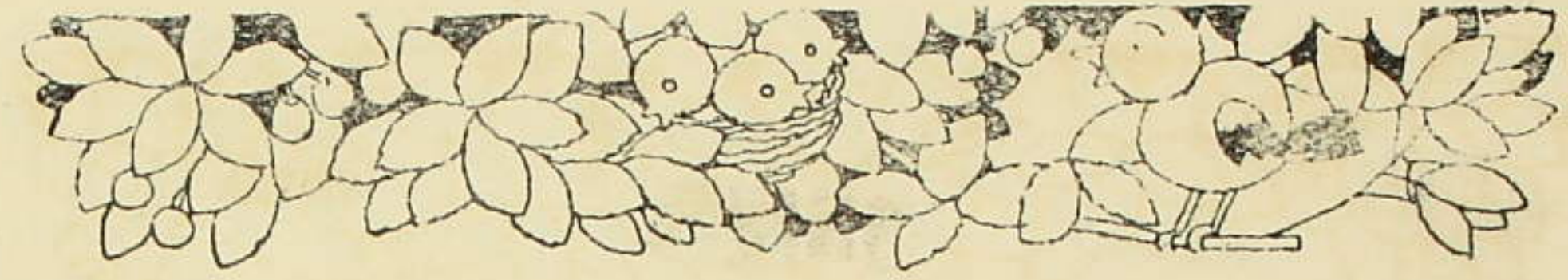
角つう出だせ

槍やり出だせ

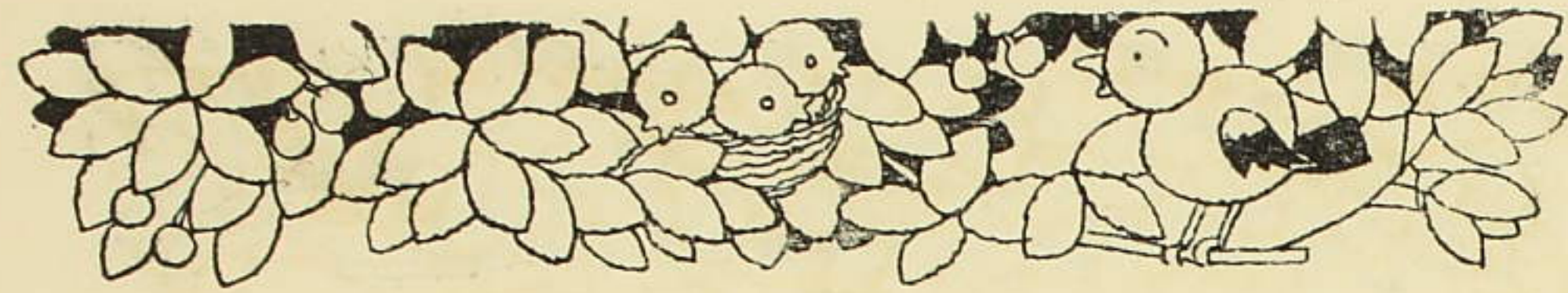
目玉めだま出だせ



野道を通る
郵便屋さんも知らぬ
あそこから通る
お爺さんも知らぬ
芒の中で
桃の花咲いた

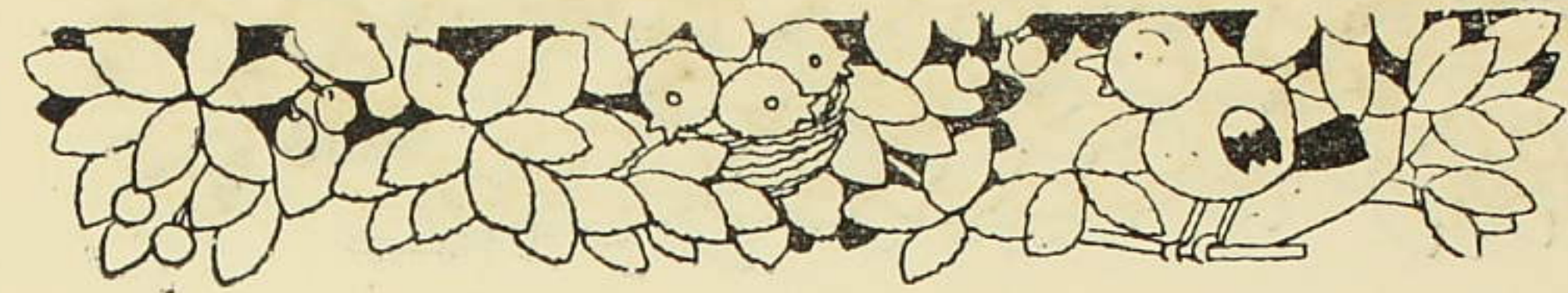


野の桃
芒の中で
桃の花咲いた
芒の中の
桃の木が低い
芒の中の
桃の花白い



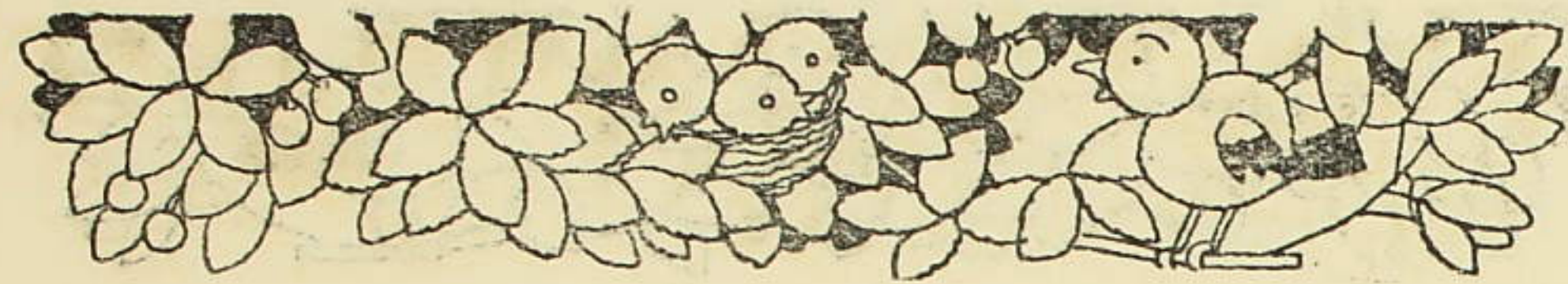
向う鉢巻
腕まくり
木馬の尻を一打ち打つて
赤ん目をしてやつたのさ

向う鉢巻
腕まくり
木馬に乗らうとする俺を
鈴子がくすくす笑ろたのさ

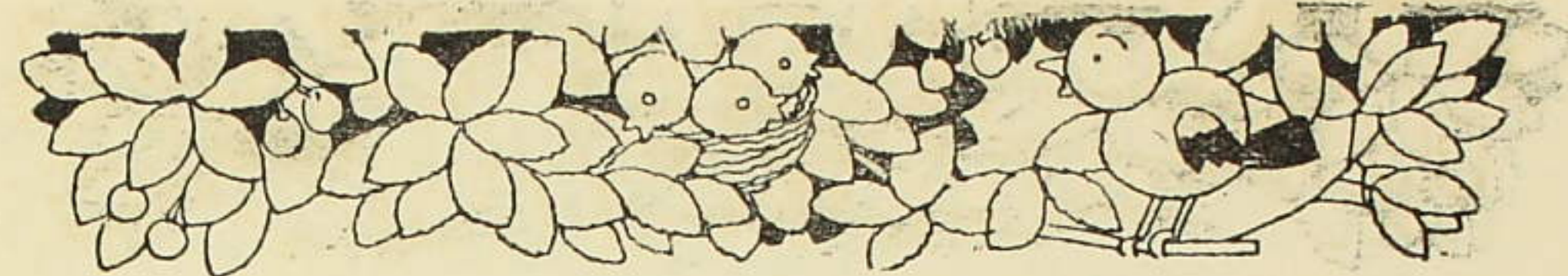


木馬
鈴子が
笑うたから
おれさま
赤ん目をしてやつた

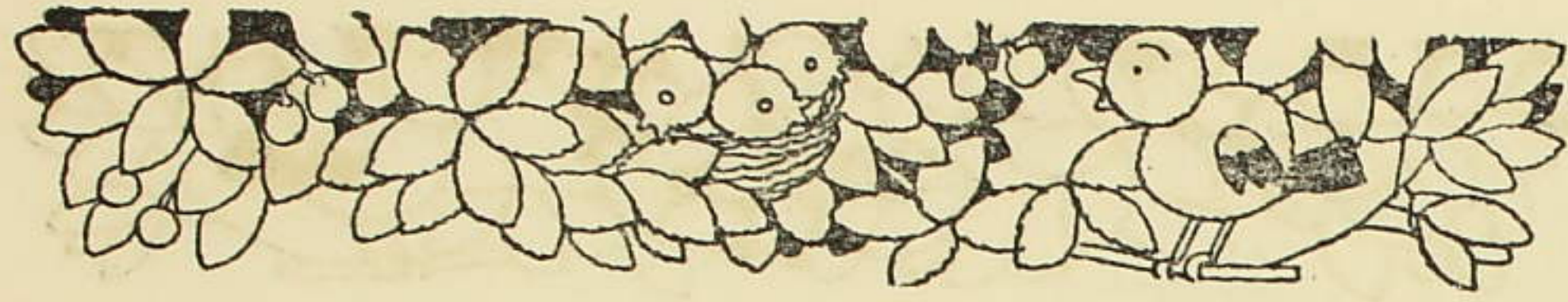
鈴子はおしやれで
氣取屋で
先生の前では
お行儀もの



のびる蘆の芽
 波うてば
 かくれる蘆の芽
 海も陸も
 平らに日が照り
 砂が黒く
 よしの芽が紫

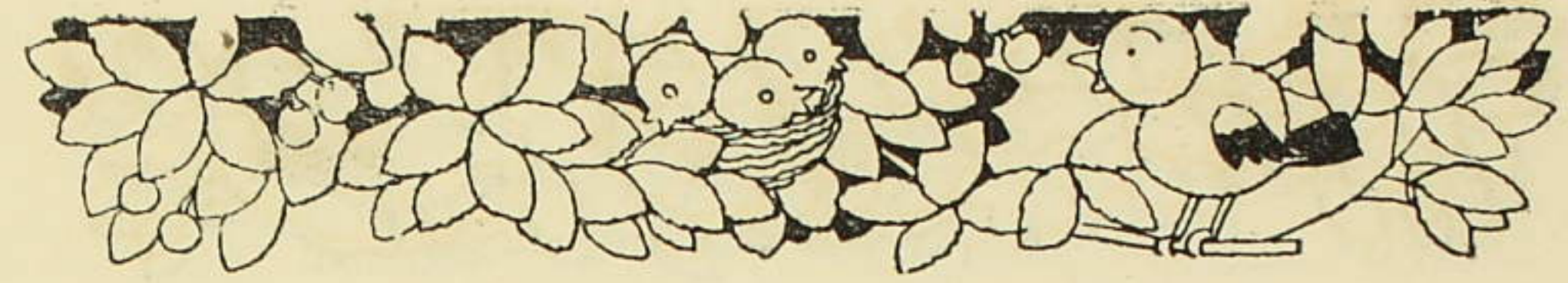


よしの芽
 砂原の
 鳥の跂あこ
 風吹けば
 消える跂あこ
 水ぎはに



鳴りひびく
ごこんごこんご

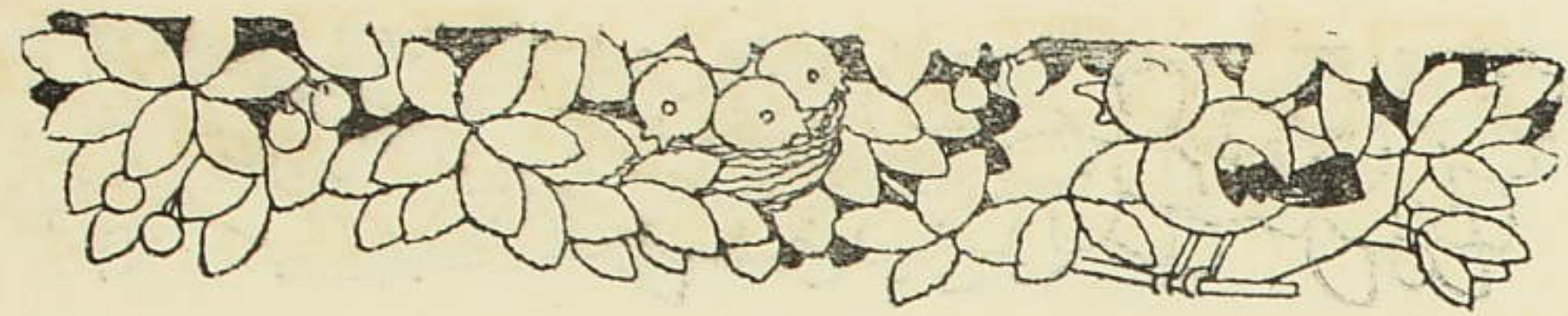
雀すずめが立たつても
小こ犬いぬが吠ほえても
平へい氣きな顔かほして
洗せん濯たくしてゐる
つんぽ婆ばあさんの後うしろから
鳴りひびく
ごこんごこんご



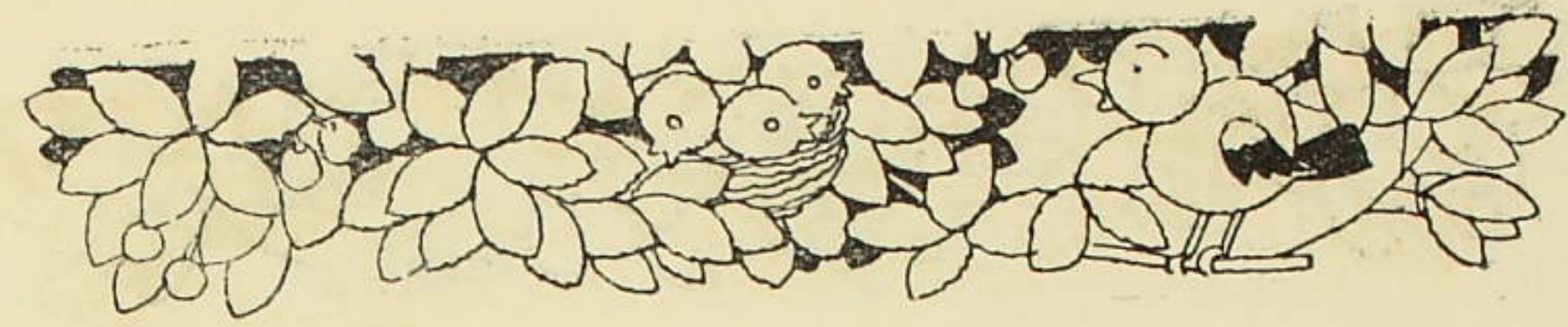
猿さる 曳ひき

猿さる 曳ひきの
たたく太鼓たいこは
ごこんごこんご
鳴りひびく

草くさ家やの軒のきばの
桃うもの花はなから
雀すずめがはつこ
飛こび立たつごころへ



お前まへが鳴なくこ
 山やまがだんだん
 青あおくなる
 山やまが青あおめば
 その山やまおくの
 温泉ゆにゆく道みちの
 雪ゆきがこける



ほごごぎす

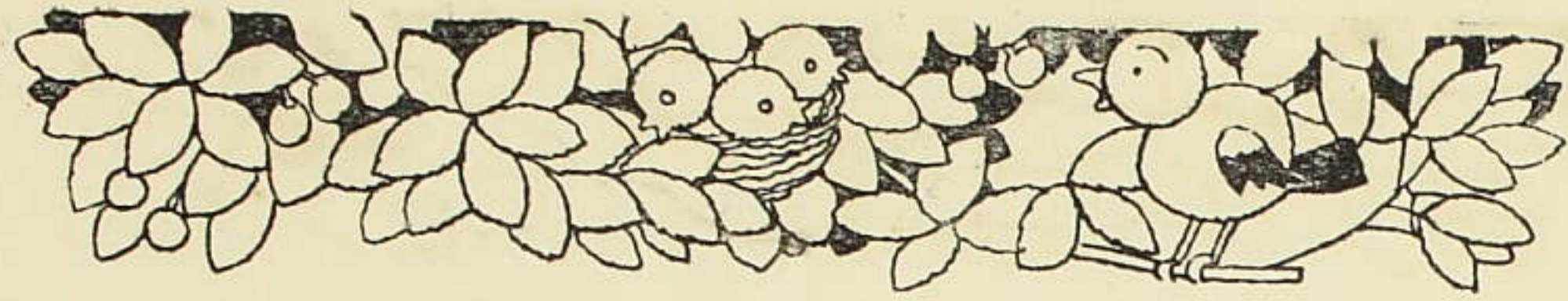
時鳥ほごぎす

朝あさ鳴ないて夜よる鳴ないて

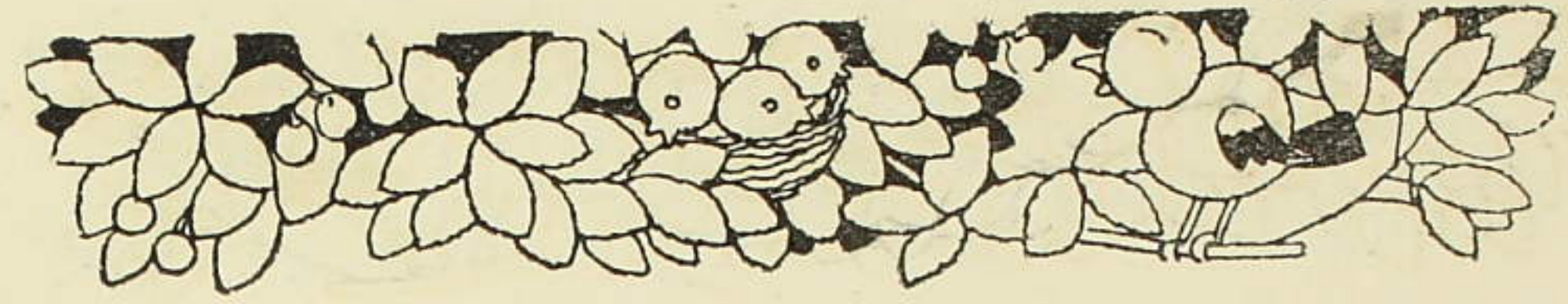
鳴なきこほせ

お前まへの聲こゑは

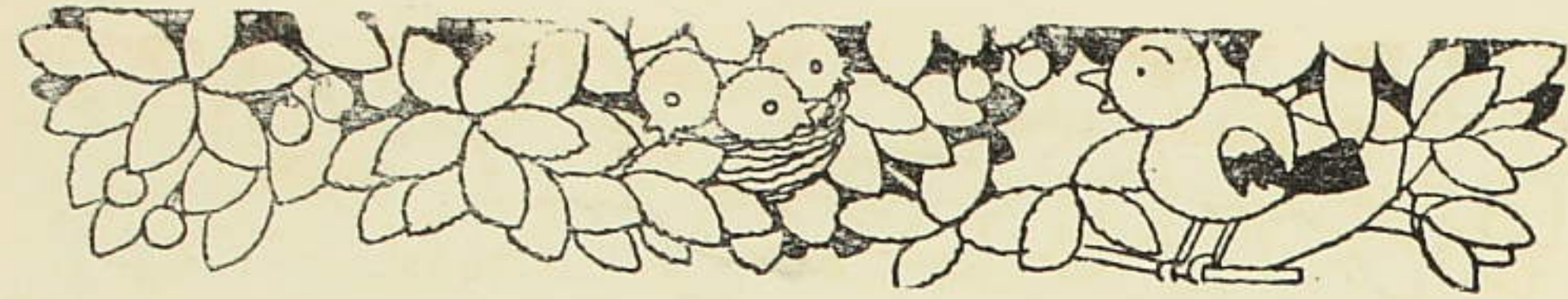
寂さびしいけれご



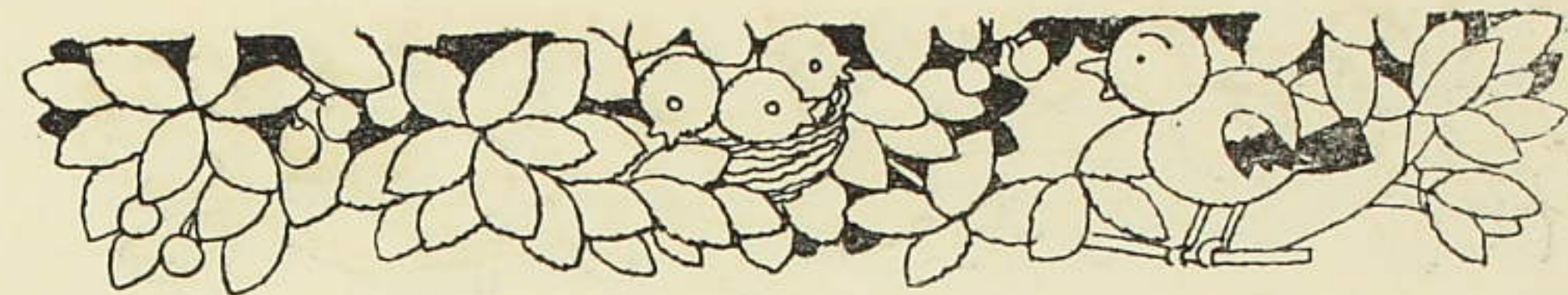
杉すぎの林はやしが
 まつ暗くらい
 お山やまへのぼる
 行者ぎやうじやさん
 そばの畑はたけを
 ごほり越こす
 そばの畑はたけは



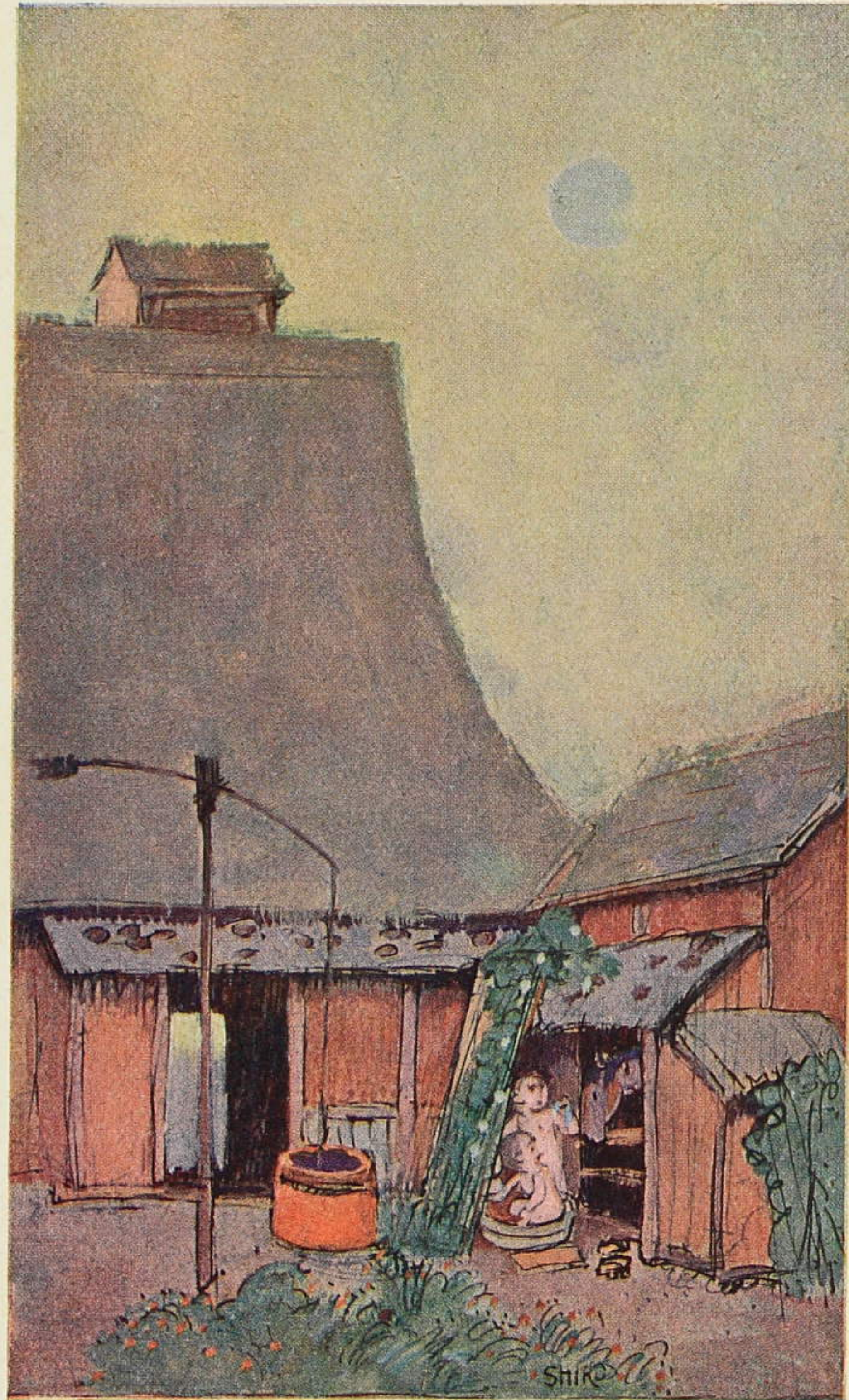
お山やまの行者ぎやうじや
 谿たにのあひだに
 花はなさいて
 蕎麥そばの畑はたけが
 眞白まっしろい
 山やまの上うへまで
 木きが立たつて



行者ぎやうじやの腰こしに
 なる鈴すずは
 だんだんのぼつて
 聞きえない
 雲くもの中なかから
 日ひがさして
 そばの畑はたけが
 まつ白しろい



二ふた三さん枚まい
 杉すぎの木こ立たちの
 はてがない
 杉すぎの林はやしに
 雲くもが湧わく
 雲くもの中なかから
 鈴すずが鳴なる



の	の	す	弱 <small>よ</small>	ち	正 <small>しやう</small>
そ	ろ	な	い	よ	
の	ま	ほ	の	こ	
そ	な	な	が	く	直 <small>じき</small>
ま	牛 <small>うし</small>	お	兎 <small>うさぎ</small>	ね	小 <small>こ</small>
る	ん	ん		づ	
り					
ま	ほ	馬 <small>ま</small>		み	犬 <small>いぬ</small>
し					
よ					



お夕^{ゆふ}棚^{たな}馬^{うま}
 月^{つき}顔^{かほ}の^の
 様^{さま}白^{しろ}下^{した}顔^{かほ}
 ま^まい^いせ^せ引^ひ
 る^るま^まい^いつ^つ
 い^いこ^こめ^め

顔^{かほ}盥^{たらひ}厩^{うまや}ひ
 出^だの^のの^のこ
 し^し上^{うへ}馬^{うま}り
 た^たへ^へが^がで
 寂^{さび}
 し
 い



わ父^{ちち}盥^{たらひ}田^た
 たさん^{さん}の^のか^か
 し^しん^ん行^{ぎやう}ら^ら
 も^もも^も水^{すゐ}歸^{かへ}
 裸^{はだか}裸^{はだか}つ^つ
 て

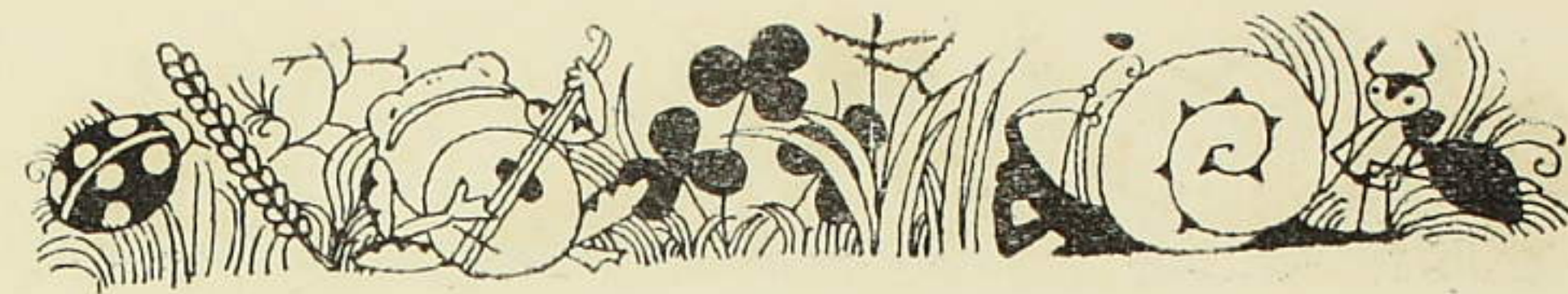
わ父^{ちち}花^{はな}夕^{ゆふ}
 たさん^{さん}の^の顔^{かほ}
 し^しん^ん下^{した}棚^{たな}
 も^もも^もの^の
 裸^{はだか}裸^{はだか}

行^{ぎやう}
 水^{すゐ}

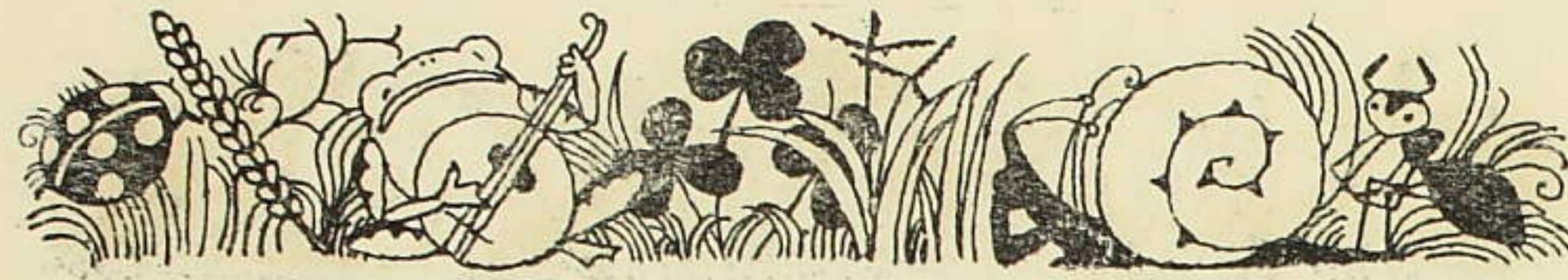
心
 ら
 心
 ら



雲くもをを追おつつててののぼぼるる
 波なみをを立たててののぼぼるる
 木きのの葉はのの風かぜががくく
 ささつつののここううへへ
 山やまのの向むかいいへへ
 雲くもがが動うごくく
 秋あきはは涼すずしいい
 山やまああららかからら
 波なみをを立たてて
 へへののぼぼるる
 山やまああららかからら



白しろ木きのの葉は裏うらががくく
 動うごくくのの葉はががくく
 風かぜががののぼぼるる
 木きのの葉はをを動うごかかししてて
 山やまのの上うへままでで
 山やまのの下したかからら
 風かぜががののぼぼるる
 ののぼぼるるののぼぼるる
 風かぜ



石いしより堅かたい鑿のみの尖さき
 鑿のみより強つよい腕うでさきで
 かつちんく石いしをきる
 かつちんく日ひが暮くれて
 火花ひばなが見みえる鑿のみの尖さき
 鑿のみの手てもさは暗くらくても
 かつちんく石いしをきる



石いし
工わざ

かつちんく石いしを鑿きる
 眼鏡めがねをかけて石いしをきる
 眼めもこを据ゑて石いしをきる
 汗あせを流して石いしをきる
 かつちんく石いしをきる



やつて来たのはお仙でござる
 お仙もござりおてんばなれば
 板の小橋をかたかた駆ける
 驅けるころげる霰が踊る
 踊をば板の上でござる
 板にかたかた足音立てて
 おもしろいぞや小僧とお仙
 おもしろいぞや小僧とお仙
 そこで霰がやつこらすつこら踊る



霰
 板の小橋で霰が跳ねる
 跳ねてころげて踊ををる
 踊をば板の上で踊れ
 板のひびきで音頭が要らぬ
 渡りかかるは小僧でござる
 小僧もござり正直なれば
 丸い頭であられを受ける
 うけた霰がやつこらさこ踊る



喧嘩 <small>けんわ</small>	笑 <small>わら</small>	笑 <small>わら</small>	笑 <small>わら</small>	兄 <small>あに</small>	弟 <small>あに</small>	嘗 <small>な</small>	仔 <small>こ</small>
が	ひ	ふ	ひ	が	が	め	犬 <small>いぬ</small>
出 <small>で</small>	出 <small>だ</small>	な	た	笑 <small>わら</small>	笑 <small>わら</small>	ら	に
来 <small>き</small>	し	弟 <small>あに</small>	く	ひ	ひ	れ	顔 <small>かほ</small>
ぬ	は		も	出 <small>だ</small>	出 <small>だ</small>	て	を
				す	す		



仔 <small>こ</small>	垂 <small>た</small>	鼻 <small>はな</small>	泣 <small>な</small>	兄 <small>あに</small>	喧嘩 <small>けんわ</small>	弟 <small>あに</small>	喧嘩 <small>けんわ</small>	兄 <small>あに</small> 弟 <small>あに</small>
犬 <small>いぬ</small>	れ	ん	いた	も	嘩 <small>わ</small>	が	嘩 <small>わ</small>	
が	る	棒 <small>ぼう</small>	た	泣 <small>な</small>	に	泣 <small>な</small>	に	
嘗 <small>な</small>	鼻 <small>はな</small>	が	顔 <small>かほ</small>	き	勝 <small>か</small>	き	負 <small>ま</small>	
め	ん	垂 <small>た</small>	から	出 <small>だ</small>	つ	出 <small>だ</small>	け	
る	棒 <small>ぼう</small>	れ	る	す	て	す	て	
	を							



熊くま行ゆくよ下くだるよ足あし早はや太た郎らう
 一い里り山やま道みち半はん里りは野の道みち
 太た郎らう急いそいで學がく校かうへまゐる
 村むらの學がく校かうの祝いはひがござる
 谷たには七なな谷たに八や谷たにの下したに
 雪ゆきがががやく庭にはから谷たにへ
 動うごく注し連め繩なは朝あさ日ひがさして
 焚たき火び燃もえたつ注し連め繩なは動うごく



一月一日

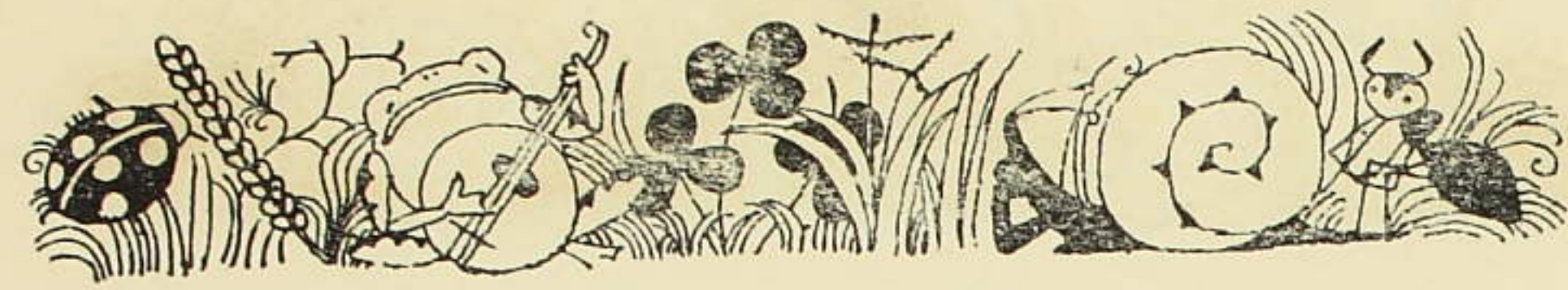
一いち月げつ一いち日じつのひき明あけに
 山やまの圍み爐ろ裏りで菽ま豆めがらを焚たく
 豆まめがはじけて柱はしらにあたる
 あたる柱はしらが大だい黒こく柱はしら
 大だい黒こく柱はしらに注し連め繩なは張はつて
 焚たき火び燃もえたつ注し連め繩なは動うごく



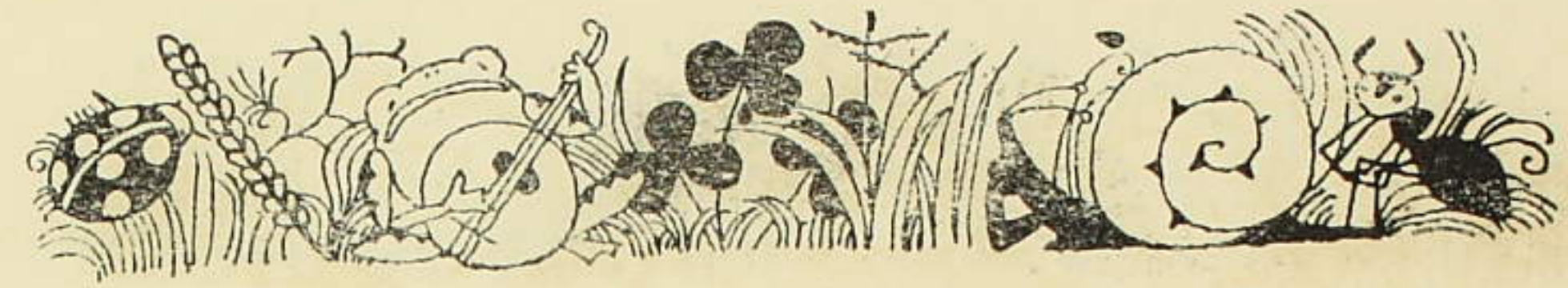
堀つた明りは
 何所から生れる
 わたしの鍬の
 尖から生れる
 不思議なこちや
 汗出して掘れ
 一心になつて掘れ



土掘れ
 土掘れ
 一尺掘りや
 一尺明るい
 二尺掘りや
 二尺明るい
 不思議なこちや



鶏とり小舎こやに鶏とりの騒さわぎが止やむこ
村中むらぢゆうが急きふにひつそりこする
庭にはさきの桃ももが眞赤まっかに咲さいて
巢箱すほこにころがる卵たまごひとつ



桃ももの花はな

巢箱すほこに卵たまごを産うみおこして
自分じぶんでおごろく牝雞めんどりのころ
ほかの牝雞めんどりも首くびをのぼして
聲こゑをそろへる鶏小舎とりこやのさわぎ



野の青あをい芒すすきの
 でぬれる
 何なにしてぬれる
 翼つばさがぬれる
 蟲むしをさがして
 小こ蟲むしをさがす
 夜よ明あけから出でて
 親おやつばめ



雛ひなつばめ
 親おやが來きたさて
 嘴くちばしひらく
 黄きいな嘴くちばし
 揃そろうてひらく
 何なんこ言ゆてひらく
 お腹なかすいたこ
 言ゆてひらく
 燕つばめ



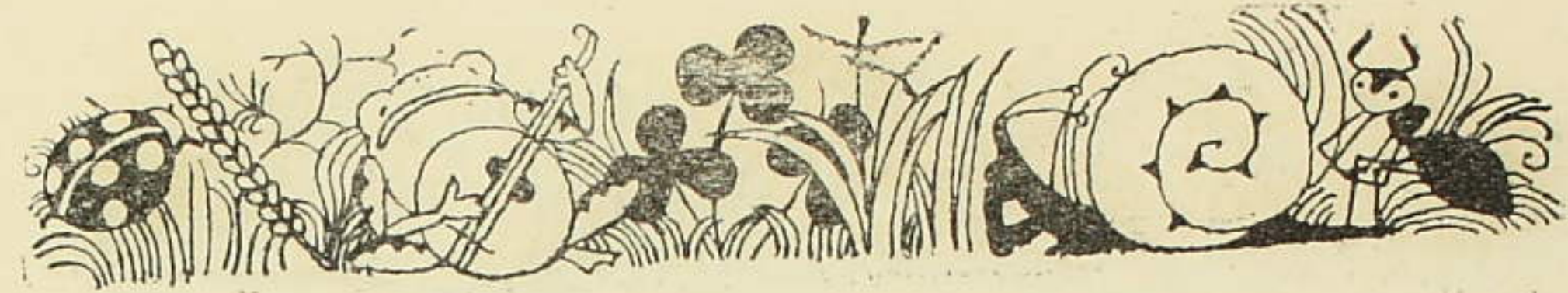
母^{かあ}さん行^ゆきましょよ
行^みつて見^みましょよ
うらの田^{たん}圃^ほの
おたまじやくしに
手^て足^{あし}が生^はへた
手^て足^{あし}が動^{うご}く
ちよろ／＼早^{はや}い
尻^{しつぽ}尾^びが動^{うご}く
ひよろ／＼のろい



おたまじやくし
後^{うしろ}ろから
母^{かあ}さんの腰^{こし}を
押^おすのは
みいちやん
前^{まへ}から
母^{かあ}さんの手^てを
ひつばるのは
三^{さん}ちやん



未^まだ葉^はが若^{わか}い
日^ひの照^てる見^みれば
きんきらきらりこ
露^{つゆ}がきらきら
高^{たか}い柿^{かき}の木^き
畑^{はたけ}にすつくり



雨^{あめ}
黒^{くろ}雲^{くも}黒^{くろ}雲^{くも}
白^{しろ}い雲^{くも}になれ
白^{しろ}い雲^{くも}は
明^{あか}るくなれ
明^{あか}るい雨^{あめ}に
日^ひがあたれ



金魚賣

苗代田圃

田の中の小村

金魚屋さんの呼び聲は

村の端から端まで透る

村は草家檉が高い



高い檉の若葉の下を

金魚や金魚と呼び歩いて

田圃に出抜ける金魚屋さん

金魚屋さんの笠は

大きくて白い

お山の雪は

遠くて光る



明あか
る
く
て
寒さむ
い

紅もみ
葉ぢ
の
山やま
は

小こ
雨さめ
に
光ひか
る

小こ
鳥とり
の
翼はね
は



日ひ
照てり
雨あめ

夕ゆふ
日ひ
て
ら
て
ら

雨あめ
が
降ふ
る

雨あめ
が
て
ら
て
ら

鳥とり
が
飛と
ぶ



柿は揺すれるお仙は上る
 高い枝から遠くを見れば
 村のはづれの湖水が見える
 女をかしや柿の木の上で
 柿を摘んで小籠に入れる
 草を背負うた若衆たちが
 お仙お仙と笑うて通る



柿の木

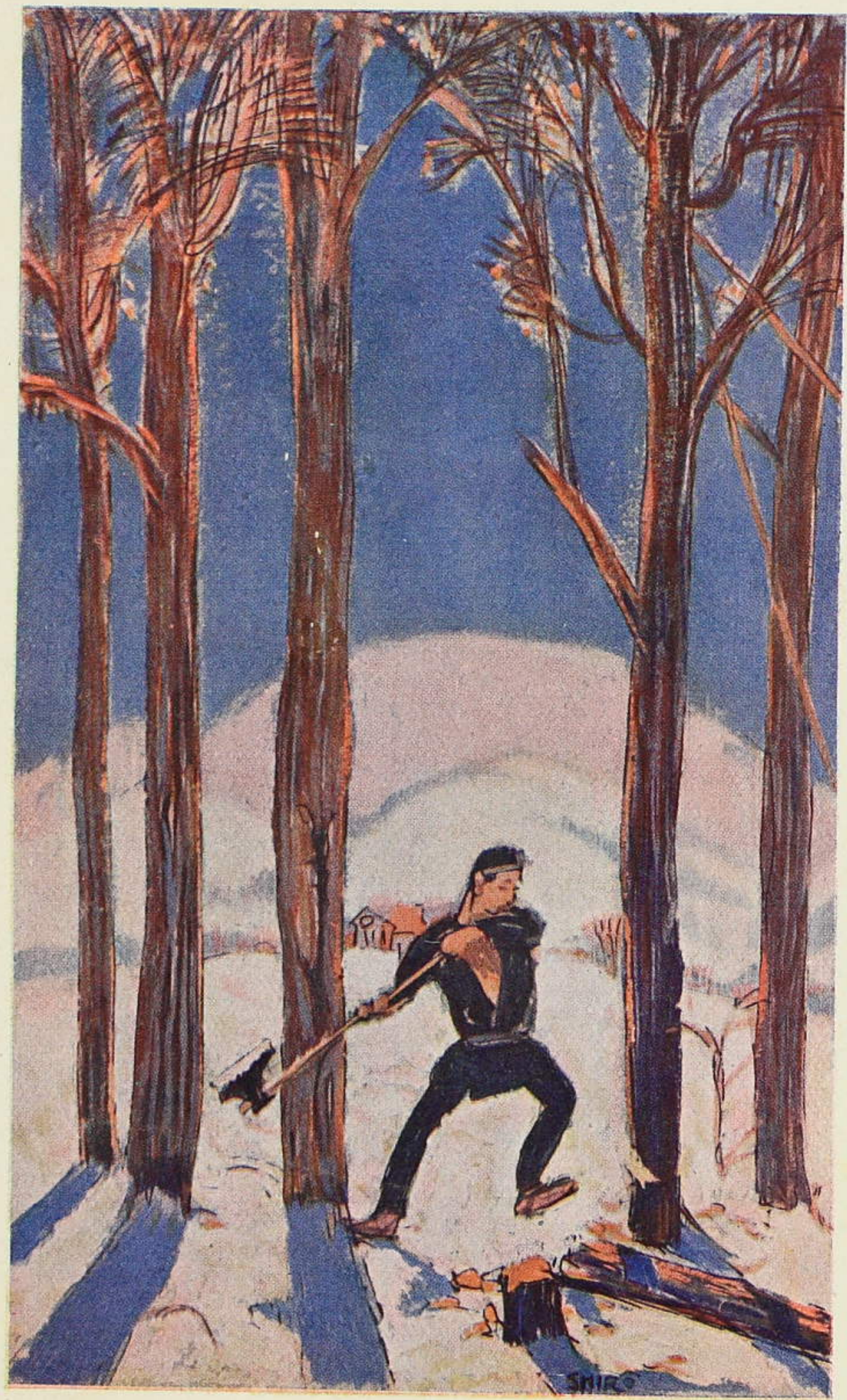
霜の降るのは霜月十二月
 赤い木の葉がはらはら落ちて
 今日も晴天草家のうへの
 柿の木に朝日があたる
 柿の木の果に梯子をかけて



お山やまの奥おくで
 刈かりる柴しばは
 裾すそ野のの町まちで
 焚たきく薪たきぎ
 のぼれのぼれ
 お山やまの雲くもが
 雪ゆきなら柴しばが
 刈かりられない



柴しば野のをのぼる
 刈かりり馬うまが
 そろつてのぼる
 野のが枯かれた枯かれた
 ひろい裾すそ野のが
 みな枯かれた
 枯かれた枯かれた
 柴しば 刈かり



泣なき蟲むし 毛蟲けむし

挟はさんで棄すてる

芋蟲いもむしごうろごろ

山椒蟲さんしやうむしごうろごろ

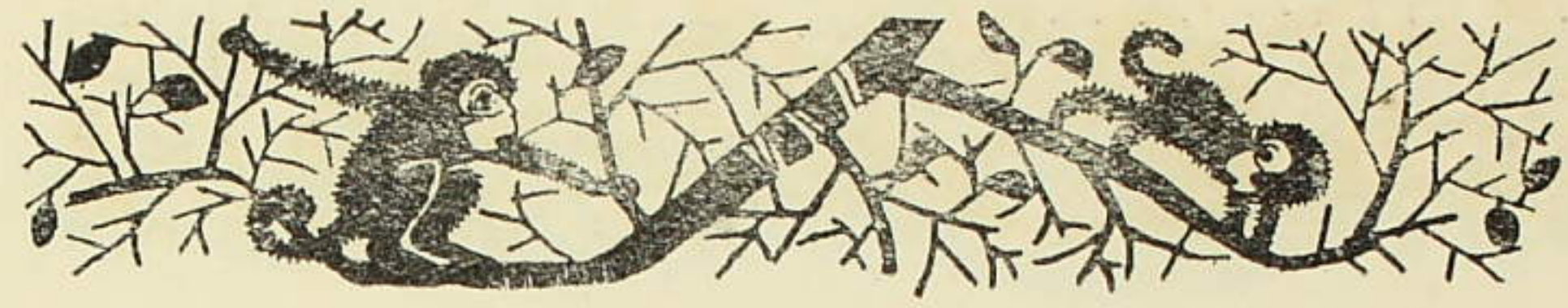
瓢箪ひやうたんぼつくりこ



日の照る
雪のうへ
木樵りの太郎
一心太郎



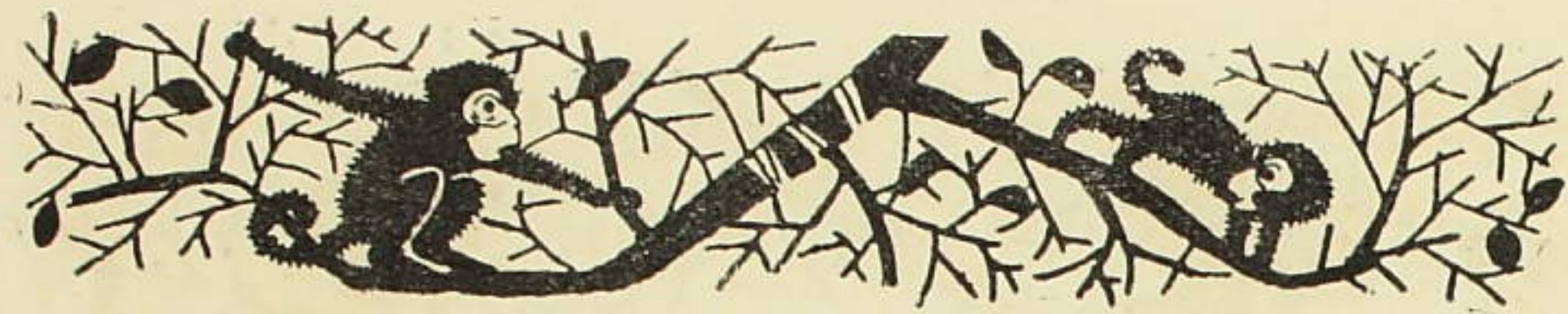
木樵の太郎
斧を振り上げれば
斧の光
冬木を樵れば
木のほひ



霰あられと雪ゆき

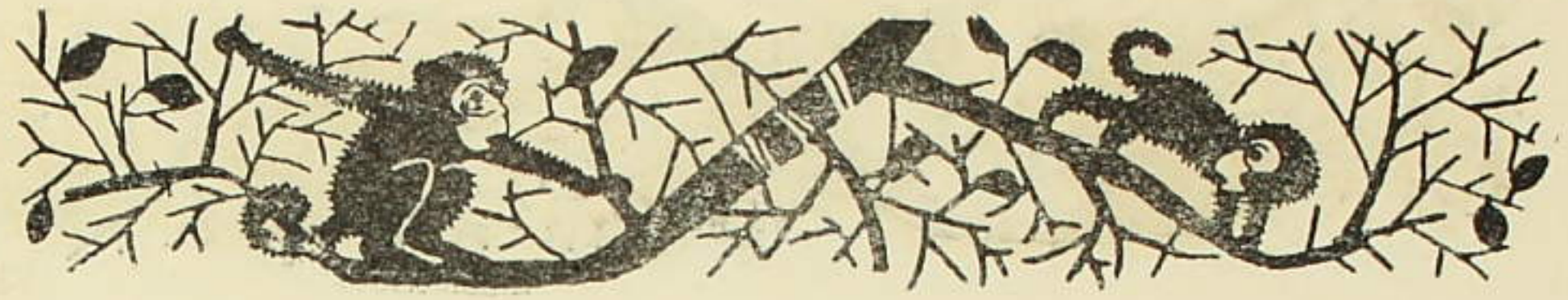
こんこん霰あられが降ふつて來きて
降ふつても降ふつても跳はねかへる
街道かいだうかけゆく小坊主こぼうずの
頭あたまの上うへでも跳はねかへる

こんこん小雪こゆきが降ふつて來きて



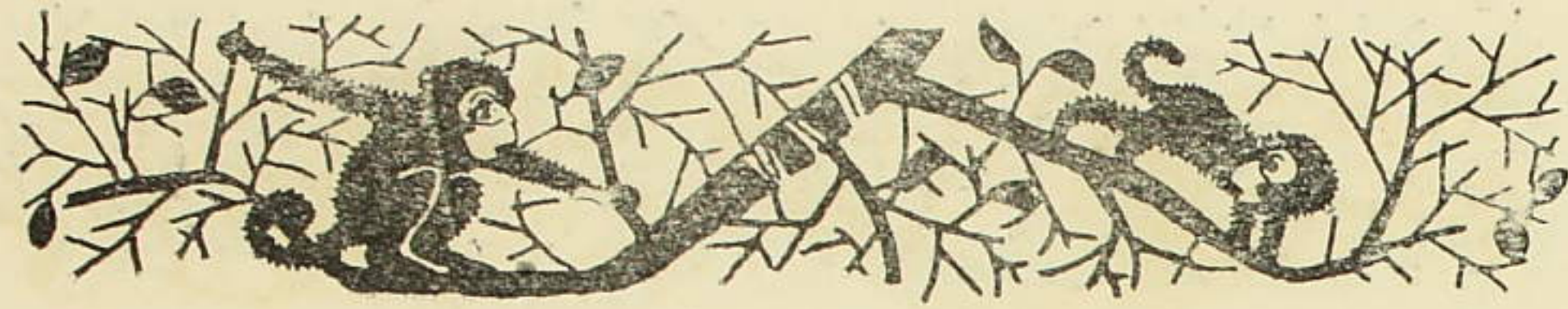
降ふつても降ふつてもまだ止やまぬ
一を昨日ごじつつくつた雪ゆきだるま
大おほきな頭あたまがまた太ふとる

こんこん小坊主こぼうず駈かけて行ゆけ
あられのあごから雪ゆきが降ふる
あんまり駈かけるこ雪ゆきだるま
大おほきなあたまと鉢合はちあはせ

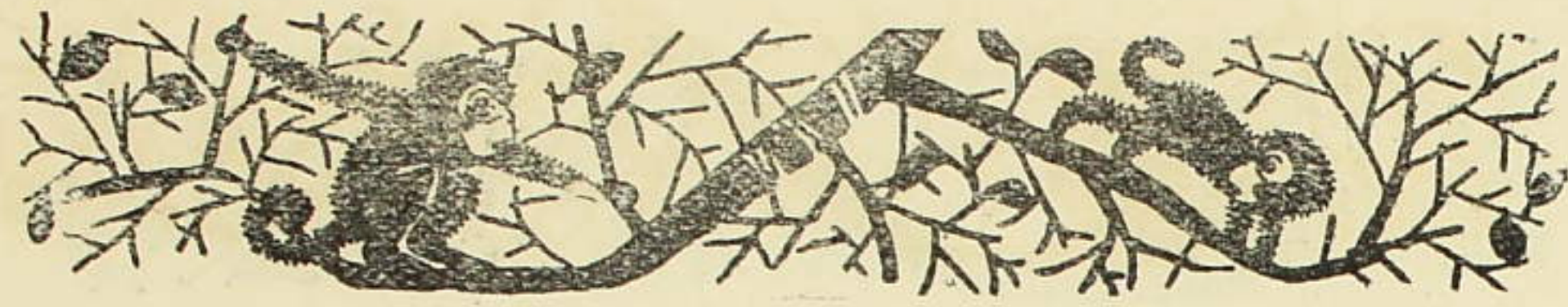


獨樂

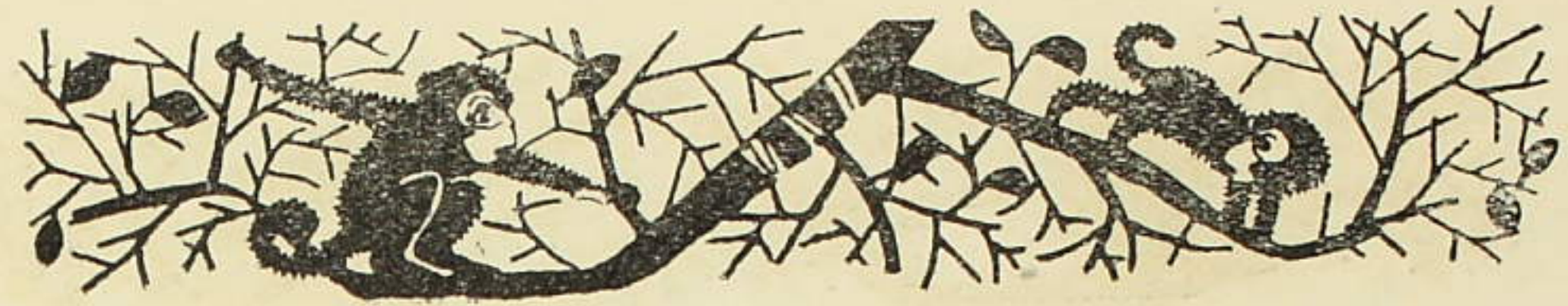
赤獨樂青ごま黄いろごま
つるつるすべる板の上に
鉢合せするのはお互さま
ごめんなさい
直に仲よくなつて



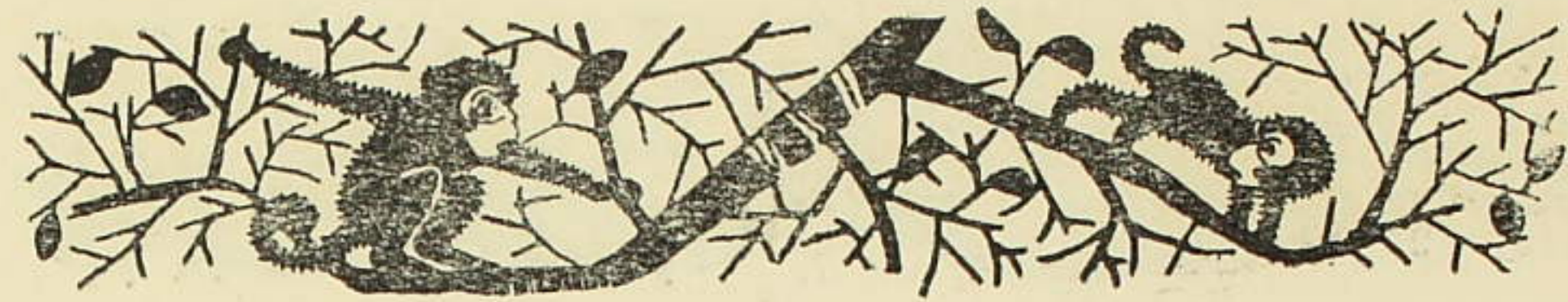
まはるまはる揃つてまはる
赤獨樂青ごま元氣ごま
くるくる跳ねて踊り出して
見向きもしないはお互さま
ごらんなさい
みんな静かになつて
うなるうなる揃つてうなる



ひよこ ひよこ
 ひよこ ひよこ
 草より稚い
 草の芽を踏んで
 ひよこ ひよこ
 お前の眼は
 露より涼しい
 露をすすつて
 ひよこ ひよこ



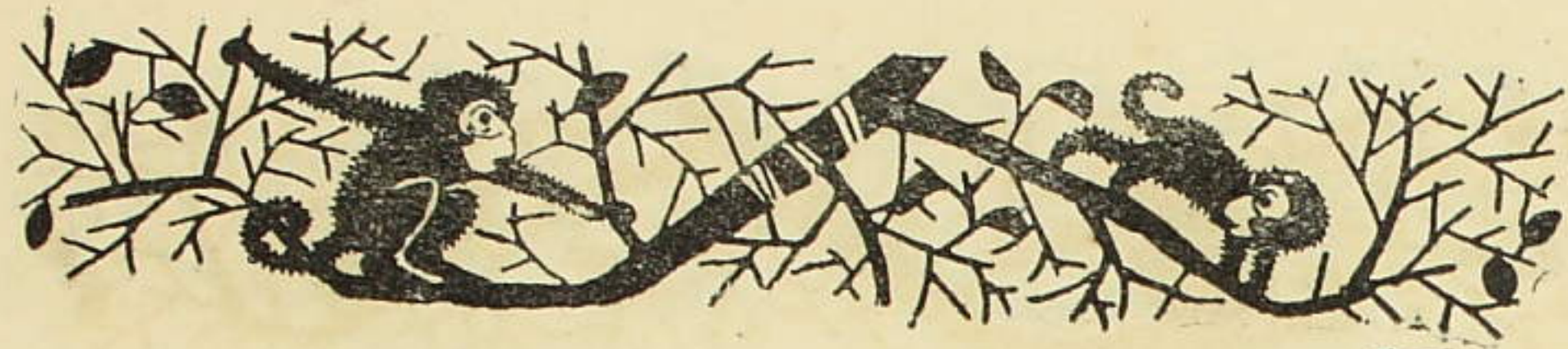
ひよこ
 ひよこ
 雛雞 ひよこ
 お前のからだは
 草より低い
 草にかくれて
 ひよこ ひよこ
 ひよこ ひよこ
 お前の足は



お前の心は
親よりやさし
親によばれて
びよびよ歩く
ひよこひよこ
お前の寢床は
綿より温い
親のお腹へ
びよびよ入る

寝たら丹波へ
起きたら山へ
お目がさめたら
お江戸まで

(京都子守唄)



乳房

母さんの乳房

生れると直ぐに吸ひ

二歳になり三歳になり

人に笑はれる今年四歳にも

離れられない母さんの乳房

姉さんも笑ふ

父さんも笑ふ

笑つちやいやよこ

乳房の中に顔をうつめ

やがてそろそろ見あげる

母さんの顔のありがたさ



こなりの坊や

こなりの坊やはわんぱくで
そして時どき泣き蟲で
學校へ行つてはなまけ蟲
お家へかへればいばり蟲

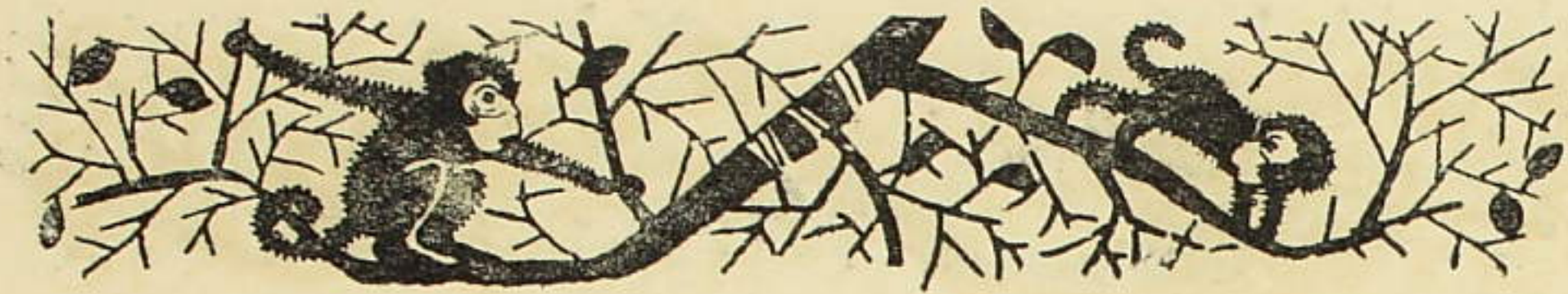
あんまり威張つて叱られて
泣いた顔は何所へ行つた
馬の尻へこびこんで



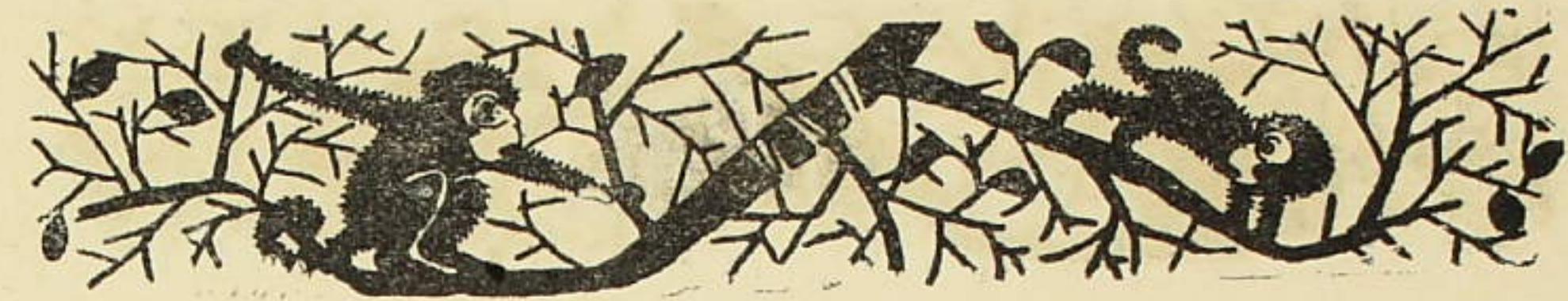
ひよいこ出て笑うた

泣いて笑ふは仙氣のくすり
しやつくり薬に鼻汁ぐすり
薬はいろいろあるけれど
板面につける薬がない

薬はきらひ
遊ぶがお好き
さうなす南瓜も畑でうごけ
みんな揃つて踊ををぞれ



大おほびび太た重かさ三さんそそ突つ
 きかり郎らう郎らうなりなり郎らうそれそれつつ
 なかりのの雲ぐももも見み立た
 雨あめごご目めああ上あちちああ
 がおろろ次じ郎らうのの負まげげたたつつたた
 落おろろ三さんのの雲ぐものの峰みねでで次じ郎らう雲ぐも太た
 ちお鳴なつつのの目め三さん郎らうのの目め
 ておりりのの目め郎らうのの目め
 来き出だししてて



だだ湧わ八はち低ひく三さん畑はたけ土つち湧わ
 んんいい月げついい郎らうのの藏くらいい雲ぐも
 だだてて明あかるる雲ぐもはは未ま次じ郎らう雲ぐも雲ぐも
 んんわわいい青あお空ぞらにに湧わくく
 高たかいい重かさななつつてて
 雲ぐものの峰みね



顔かほ中ちゆうの皺しわが
 みんな口くちばたへ集あつつた
 大おほきな目めから涙なみだを落おして
 大おほ酸すい小こ酸すいご申まをされた
 涙なみだ落おすはよいけれご
 あんまり大おほきな目めをあいて
 目め玉たまを落おし申まをされた
 閻えん魔まさまの言いふここに
 梅うめの果みは要いらぬ
 目め玉たまをかへせ子こごもたち



閻えん魔まさま

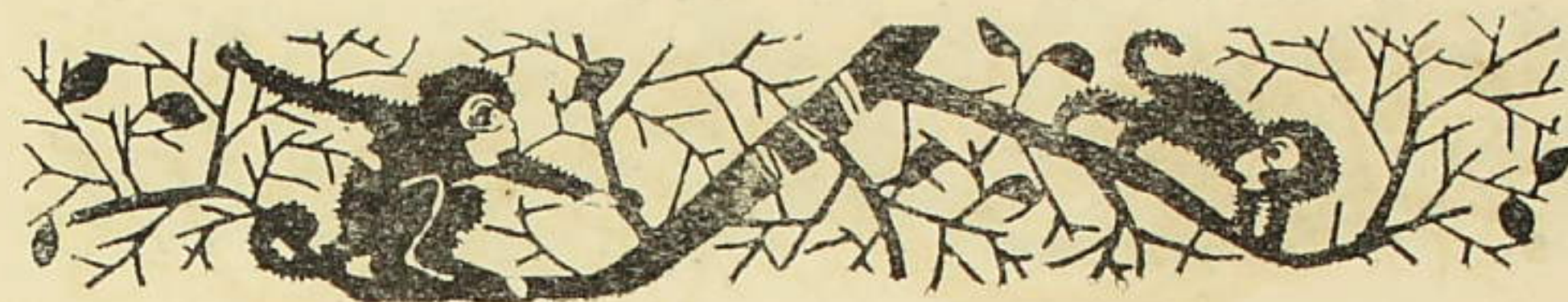
子こごもの食たべる梅うめの果みを
 睨にらんでござる閻えん魔ま大王だいおう
 えんまさま えんまさま
 お前まへも梅うめを食たべたかろ
 閻えん魔まさまの口くちへ
 梅うめの果み一つ投なげこんだ
 閻えん魔まさまが怒おこらつしやつて
 一ひと口くちに嚙かみつぶし申まをしたら



きれいな駕籠の行列が
湖水のはたを歩きました

乙姫さまは駕籠のなか
遠いところへ來ましたが
青い湖水の水を見て
急に悲しくなりました

乙姫さまは嫁入つて



青い湖水

里をはなれた山なかに
青い湖水がありました
大きな森がかさなつて
水に映つて居りました

村の長者の乙姫が
遠くの村へお嫁入



物を言はなくなりました
うれしい時にほほ笑んで
悲しいごきに泣きました

乙姫さまの笑ふごき

湖水に花が咲きました

乙姫さまの泣くごきに

青いお山が枯れました

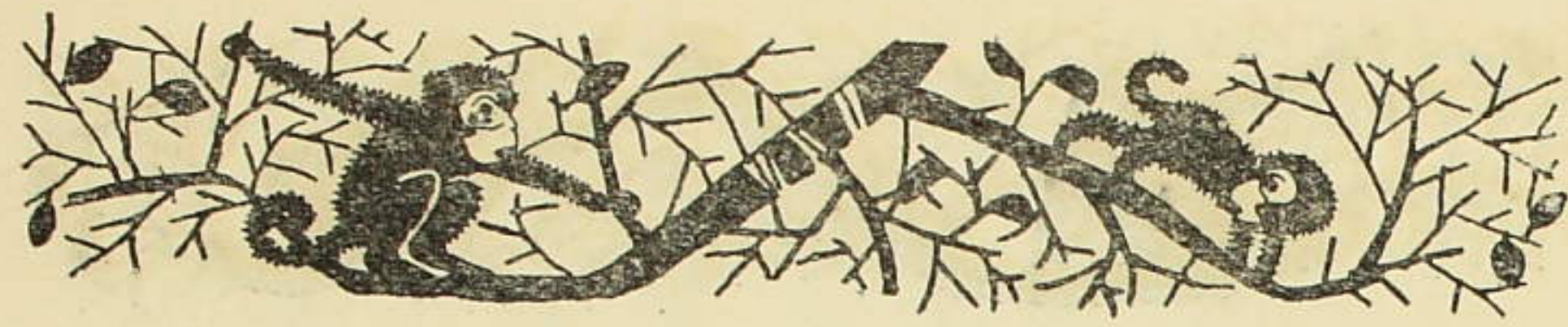
小泉山から

牡丹餅

投げて

古田小村は

一ねばり



蟲むしが かくれて 住すみました
 野のの 菊ぎくの 花はなを 見みて ゐたら
 雲くもが 通とほつて 行ゆきました
 空そらに 浮うかんで 行ゆく 雲くもの
 影かげが 花はな野のに 動うごきます
 蟲むしの 泉いづみの 音おとの する
 野のの 菊ぎくの 原はらは じんごして
 雲くもの 通とほつた 大空おほぞらは
 いよいよ 青あをくなり ました



野のの 菊ぎくの 花はなを 見みて ゐる ところ
 こぼろぎの 鳴なく 聲こゑが する
 野のの 菊ぎくの 原はらの 草くさの 根ねに
 野のの 菊ぎくの 花はなを 見みて ゐる ところ
 水みづの 流ながれる 音おとが する
 野のの 菊ぎくの 原はらの くぼたみに
 泉いづみが 湧わいて 居をりました
 野のの 菊ぎくの 花はなを 見みて ゐる ところ
 野のの 菊ぎく



赤彦童謠集 終

卷末言

大人の讀者諸氏に讀んで頂かうと思つてこの小文章を書く。少年少女諸君が讀んで下さつても差支へはない。

私には六人の子どもがある(一人は五年前に亡くなつた)私はその六人の子どもに向きあつてゐるといふ心持で童謠をつくる。私はかつて永い間小學校高等女學校等の教師を勤めた。私は學校で私の教へた多くの子どもに向きあうた心持を想ひ回しながら童謠をつくる。私には隣家親戚をはじめとして、可なり廣い範圍に知り合ひの子どもがある。私はその知り合ひの子どもに向き合つてゐる

といふ心持で童謡をつくる。親が子に向き合ふというた
とて、傳習的な型に箝まつた威嚴を取りつくる心持を
指すのではない。併しながら、私は親としての自分の愛
を突きつめる時、自分の子どもに子どもらしい眞面目さ
と質實さと根強さを希求する心がある。私が教師として
その子どもに對しても、希求するものの種類は同じであ
る。その子どもを大切に思へば思ふほど、その希求が鮮
やかに濃くなるといふ感がある。自分の知り合ひの
子どもに對しても、世間一般の子どもに對しても、希求
するものは矢張り同じである。既に斯様な心持で子ども
に對することを私の必然的心理とする以上、私が童謡を

つくる時同じくその希求が基底に存在するといふことは
自分としては避くべきことでないと思つてゐる。只、私
の希求が實際に當つて子どもと交渉する時に、子どもの
心理と調子が合ふか合はぬかといふ問題になれば、茲に
私に反省の餘地が生じて來ることであると思つてゐる。

或人は言ふであらう。童謡は童謡である。何所までも
子供の心に立ち歸つて作さねばならぬと。この言よきに
似て淺い。大人は大人である。焼いても煮ても子どもに
はなれない。子どもになれない大人が、假りに子どもに
なつたつもりで起居動作したら何うであるか。氣の毒な
滑稽ではないか。子供の心になつて童謡を作せといふ人

は、曩きの滑稽を移して、そのまま童謡へ持つて行かうとする人ではないか。大人が童謡を作すといふのは、何處までも大人が子供と交通することである。大人は大人の愛を突きつめて子供と交通してゐればいゝのである。そこに相互の同情が融然として合致して來べきである。大人の作す童謡は、大人と子供の同情の融合から生れると私は思うてゐる。

子供になれといふ童謡論者は、畢竟大人に子どもの物真似をせよといふ人々である。良寛上人老いて動作子供に類したけれども、子どもになつたのだと思ふと間違ふ。子どもの物真似をしたのでないこと勿論である。物真似

といふのは、多くその物に甘へることを意味する。子どもを愛するのはよいが、子どもに甘へるのは雙方の心性を傷ふに終る。子どもの感傷的な甘さを挑發したり、上迂りな外面的興味を刺撃したりするやうな作物は、さういふ所から生れて來る。子どもは何所までも質素で樸直な大地の上に立つて居らねばならぬ。(子どもには限らないけれども)質素と樸直を尊重するものは、自分が先づ質素樸直な心を以て子どもに對き合はねばならぬ。子どもの弱點に甘へるやうな文學が流行したら、子どもの前途は寒心すべきである。夫れは直に人類の前途の問題であるからである。

私は大體以上の如き心持を以て童謡を作つてゐる。私の子供に對する希求は具體的に私の童謡に現れてゐべき筈であるが實際の作物になると甚だ不徹底な心もとなひものである。此小冊子に一瞥を賜つた諸氏は、私の小意見及び作物に對して定めて意見を持たるることであらうと思ふ。私に向つて直接に教示を賜らば幸甚の至りである。

猶一言を要することがある。私の質素といひ樸直と言ふたのは、それが貧弱な見すばらしさを意味するつもりではない。質素の中に豊かさがあり、樸直な中に品位の具はつて居ることは優種族人の特徴である。古事記の傳

説を生み、萬葉集を生み、更らに奈良朝の美術を生んだ民族の心が夫れである。左様な點に於て特に私は平素尊敬してゐる平福森田兩畫伯に装幀を願つた。兩氏の苦心が理想どほりに現れて本書の品位を成し得たこと衷心よりの喜悅である。川上畫伯と私とは今まで私交がなかつた。平素雜誌「童話」に氏の畫を見てその畫風の清新質素の趣あるを欽してゐた。特に願つて會心の挿畫を得たのは同じく私の喜悅とする所である。古今書院主人も亦小生の微志を賛して、資材に勞力に惜しむ所を知らない狀であつた。諸氏の助力と盡瘁に依つて理想的の冊子を得たことかへす／＼感謝に堪へぬ。内容の相添はないのは今

後私の勉強に期するより外はない。

大正十一年三月三十日夜二時

アララギ發行所に於て 赤彦誌す

大正十一年四月八日印刷
大正十一年四月十二日發行

赤彦畫譜集奥附
定價壹圓八拾錢

版權

著者 東京市外代木山谷三二六番地
久保田俊彦

發行者 東京市外西大久保四五九番地
橋本福松

印刷者 東京市麹町區麹町二丁目九番地
小鹽眞造

東京市小鹽眞造印刷所印行

發行所

東京市外西大久保
四百五拾九番地

古今書院

振替東京三五三四〇番

アララギ叢書目次

第一編	島木赤彦 中村憲吉 合著	馬鈴薯の花	東雲堂發行 定價八拾五錢
第二編	齋藤茂吉著	赤 <small>しゃく</small> 光 <small>くわう</small>	東雲堂發行 定價壹圓貳拾錢
第三編	古泉千樫著	屋上の土	未刊
第四編	島木赤彦著	切 <small>きり</small> 火 <small>び</small>	アララギ發行所 定價八拾錢
第五編	齋藤茂吉著	短歌私鈔	春陽堂發行 定價壹圓六拾錢
第五編	齋藤茂吉著	續短歌私鈔	岩波書店發行 定價六拾五錢
第六編	中村憲吉著	林泉集	春陽堂發行 定價壹圓八拾錢

第七編	齋藤茂吉著	童馬漫語	春陽堂發行 定價貳圓五拾錢
第八編	島木赤彦著	氷魚	岩波書店發行 定價貳圓五拾錢
第九編	長塚節著	長塚節歌集	春陽堂發行 定價壹圓八拾錢
第十編	齋藤茂吉著	あらたま	春陽堂發行 定價貳圓四拾錢
第十一編	伊藤左千夫著	左千夫全集	春陽堂發行 定價各三圓五拾錢
第十二編	松倉米吉著	松倉米吉歌集	行路社發行 定價壹圓五拾錢
第十三編	土田耕平著	青杉	古今書院發行 定價壹圓八拾錢

以下續刊

